

# 針葉樹会報

第 110 号  
2007 年 10 月



## 目 次

わが現役時代

中村讚治のこと

石井左右平

昭和十七年度夏山合宿

於 穂高涸沢

中村 誉治

小野

本間

原

小野

蛭川

倉知

隆

夫

敬

博

修

保

英國アルパインクラブ

創立 150 周年祝賀行事

中村

山岳部時代の思い出

仲田

2007 年の会心の山

三井

伯耆大山—失敗の蜜

蛭川

ドッケ・シリーズの山

倉知

深田百名山完登と

蛭川

百山目の飯豊縦走

小野

八海山縦走

蛭川

「三四郎会」酒と温泉、

原

そしてちよつと山

原

北海道・花と山の旅

原

札文岳、利尻岳、羊蹄山

佐藤

佐藤

佐藤

八海山縦走

小野

八海山縦走

蛭川

表紙写真＝伯耆大山南壁 撮影・山本尚禎

編集後記

35

32

27

26

23

19

17

16

14

12

9

8

7

5

三月会通信

平成 19 年度 針葉樹会総会報告

35

32

27

26

23

19

17

16

14

12

9

8

7

5

奥三河沢泳ぎパート 2

早木戸川ゴルジュ帯

山田

秀明

活朗

久尚

博貞

浩肇

隆

夫

敬

博

修

保

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

2

中村讚治のこと

石井  
左右平（昭23年卒）

動きをこのリポートから感じ得ると考えます。なお、このリポートには、これを讃治が書いたという署名がありません。そして、リポートの最初のうちは讃治らしくなく、真面目な字を書いています。しかし、これは間違いないく中村讃治の字であり、とのほうになるとちゃんと讃治の字になっています。

こうしたことで、小島幹事からの希望を中村讚治に肩代わりしてもらいます。なお、部の書類で「中村贊治」とされているのを見受けたことがあります、讀治です。

小島和人幹事から、自分が現役だった頃の部の状況などについて何か書くようにと、サジエスチヨンがありました。丁度というとなんですが、実はこの春、我が家に戸棚から自分の同級の中村讚治の遺品が出てきて、その

昭和十七年度夏山合宿  
於穗高涸沢  
中村 讀治

10時45分の例の列車にて本隊出発

（昭和15年4月～5月）の部活動のリポートがありました。讃治や山崎や我々が予科に入学した第一年です。パールハーバーのことがあつて4ヶ月後のことです。この讃治のリポートは、この一

本三	根本、森、小泉、林、樺淵。
本一	松下、大野。
予三	伯耆。
予二	樋口、眞木。
予一	石井、岩崎、関、山崎、中村

らしい一年たつたと思ひます。この後日本は、学校は、山岳部は、急速に変わつていきます。

睡眠不足の眼をこすりながら島々駅を出る。眩しい程の光が眼に沁みる様に痛い。中電迄行くのにもうへばつた。こいつはどうもいけないと思ふ。一足毎に足にひゞくザツクを背にいよいよ徳本峠へと歩き出す。

このリポートは、讚治が参加した山行のリポートであつて、当時の部活動のすべてをカバーしているわけではありません。ただし、恐らくかなりの部分をカバーしていることになると思います。そのことは別として、部の

内は編集者注

ばかり願つて居てはもうメツチエン（若い女性）など目に入ろう筈がない。発電所の少しかつた。いよいよへばつてアゴを一尺もつき出して歩く中に附属の連中についた。パチ「三ツクネーム？」を先頭に十五六人も居るうか。何しろへばつて居たので、弟からヤツケを受け取つたのも夢現つ。岩魚止めに着いた時は全く打倒れる様にして休んだが、どうしても肩が痛い。いよいよこれからが問題だと聞いてはファイトも何も消え去つてしまつた。ジグザグの登りにかかる前にとうとう消耗し尽くしてしまひ、三十三曲では足が上

がらなくなってしまった。伯耆さん、松下さんと一緒に遙か遅れる。曲る毎に倒れて休んで行くがとても助からない。その中、根本さんが後にまはつて支柱で追ひ立てるし、泣きの涙で頂上に出た時はもう薄暮の頃だつたらう。〈徳本峠の〉チーズとお茶漬けにやゝ元気をとり戻し、一緒に降り出す。

大崎さんとザックを変えて見た所、軽いので占めた、とばかりかけ下つてしまひ、後で彼氏があわてゝ呼ぶのもかまはず、一気に白沢の出合迄行く。何しろ始めての事とて徳沢園もわからず、うろうろして居る中に暗くなる。その中、眞木さんと関が来て、いよいよ真つ暗になつた林道を関のベビーライトをたよりに痛む背中と肩をなだめつゝ、ぶらぶら行く。丁度真中辺で小林さんと浜口さんが灯を持つて来るのにあひ、安心する。徳沢の入口で又々へばつてしまひ、ころがつて居る中に高野さんが来て呉れてやつと徳沢にたどりつく。あまり背中がひりひりするので見てもらつた所、五六ヶ所もむけて居るとの事に呆然となる。沁みて痛いのを我慢しながら風呂に入つて早く眠る。

### 七月二十二日

佐藤、森、小林、鈴木、樋口、大崎、先発して涸沢入り。高野、浜口、大野、石井と共に上高地へザック四ヶと野菜、荷上げの為行

く。昼飯を食つてからぶらぶらと昨日喘ぎに喘いで来た道を逆に徳沢から戻つて行く。仲々よい氣持である。明神池をまわつて五千尺へ行くとまだトラックが来ないといふ。夕方になつて来るし、トラックは来るかどうかわからんと言ふし、やれやれと思つて居る中にやつとこさ上つて来た。暗くなつた林道を徳沢へ。この日、山田さんが一般学生を連れて沢渡から上つて来た。徳沢では大天幕にギュウギュウになつて眠る。

### 七月二十三日

徳沢の朝。明神の岩稜が眉に迫る。飯をすましてからいよいよザックにつめ出す。個人用品を入れ切つたザックをならべておいて本三の連中が片端から色々なものを投げ込む。見る見る中にザックが丸々とふくれ上がり、思わず溜息が洩れる。八時半、一列になつて黙々と出発。岩小屋でもう腹がへり、飯を食はんとする説も出たが本谷出合迄といふ事になり出発。出合の所で横尾においていた荷を取りに先発隊が下つて来たのに遇う。元気一杯にかけ降りて行つた。出合から例の急な登りには汗をたんまりかいてやつと涸沢が見え出す。仲々近づいて來ないので又へばり、三時半過やつとこさとカールの下に出る。先発の連中はもう天幕に戻つてしまつて紅茶があるぞーっと怒鳴つて居る。カールの底の雪を踏

んで岩を少し攀つて天幕へ。すぐにばたばたと天幕を建てて落着く。夜は入山コムパ。紅茶と干バナナでにぎやかに歌ふ。頭上には満天の星。涸沢槍と北尾根が黒々と浮き出して見える。

### 七月二十四日

全員、奥穂詣りをする。グリセードの練をしてく。ジヤンの頂で雨に降られ猛沈痛。飛騨尾根へ行つた林、清水さんと共に穂高小屋に雨宿り。小屋直下のグリセードは少し恐ろしいと思つた。松高入り、山上来幕。

### 七月二十五日

カールの底の天幕にはまだ日は射さないが、周囲の山々はもう朝陽に染まって輝いて居る。山田、松下、関、眞木、中村、ザイテンへ。松下、中村の順に登る。別に感激も憶えず、コルでアップザイレン。山田さんがあざやかにザイルを外す。飯をくつて北穂へ。ガスの湧き起る瀧谷をのぞいて見る。縦走路の方がザイテンよりこわかつた。涸沢コルにて（上條）孫人にあふ。コルよりのグリセードで眞木さん豪快なスリップ、ピッケルをはなして下で確保中の山田氏にぶつかり、山田さんもはねとばされたが、折重なつて危うく止まる。此の頃より雷鳴は雨を伴ひ、大夕立。びっしょり濡れて帰幕。此の日、高野、岩崎、徳沢より。清水、林戸、川村、西山、東京より来る。

## 七月二十六日

朝から曇りで快調ならねど、小泉、鈴木、眞木、関と共にジヤンダルムへ。ロバの耳にて下に捲きすぎ、いやな草付を登る。

## 七月二十七日

休養日となる。一時頃朝昼兼帶の飯を食ひ、清水さんと共に一年薪取りに島の下迄行く。浜口、佐藤、川村氏下山。早稻田入る。足達来る。松下、樺淵、岩崎、下山す。

## 七月二十八日

快晴に気をよくして張り切つて滝谷へ。三峰直下へと散つて行つた本科、予科の上級部員を送つてゆつくり北尾根へ。小林、西山、石井、眞木、大野、関、中村、山崎、五六のコルより行く。又白池に深くcharmされ、合宿解散後、必ず行こうと思ふ。前穂から穂高小屋迄、遙かに槍を眺めつつ歩く気持は何とも云えない。此の日、直下のグリセードに、関すばらしいスリップをやり、下の岩に乗り上げて止まる。腰が痛いと言つてくさつて居た。丁度居合わせた山上青くなり春田と共に捲く。

## 七月二十九日

合宿最後の登攀日。小泉、大崎、林戸、西山、眞木他全員、本谷まわり。がらがらと本谷迄降り、クラクラする程暑い日光になやみつつ登る。大切戸の少し手前で一寸ルートを捲く。

誤り、ヤブコギなぞやる。大切戸より一つ北穂側のコルに出て北穂へ。途中、クラック尾根登攀中の根本、林氏を望み、感激する。北穂の頂で小泉さんのうまい飴に舌鼓を打ち、

すっかり見おぼえのある縦走路を涸沢コルより帰幕。解散コムパを各天幕別に行ふ。火の始末悪く、炊事用フライをもやす。方々の学校が下るらしく、花火などもあがる。おそらく迄よからぬ歌なぞ歌つてさわぐ。

## 七月三十日

眠りをさまして見ると雨。おやおやと思いながら起きて飯を作り、よいよ天幕をたたんで涸沢に別れをつげる。来た時よりはかるい荷だが、へばつて居る為、息を切らしながらどんどん降つて行く根本さんを追いかけて行く。雨は止んだのかえつて涼しい位だ。三時、徳沢へ。里から上つて来たばかりの連中の顔を見て俺達は大分焼けたなと思ふ。樋口、関、眞木は上高地へすぐ出発。残りはビールを雪腹飲んでいい心持になる。天幕に泊まる。合宿は芽出度く解散。

## 徳沢生活、大滝常念縦走

上高地より奥又用食糧の荷上げ。ところが山田さん消耗し、帰つて了つた為、猛くさり、明神に泊まつた大野、林戸氏を襲つてビール

を飲む。明日のプランがはつきりしないままに一日はすぎてゆく。天幕には小林、伯耆、大崎、中村、石井、山崎。

## 八月一日

伯耆、石井、山崎、帰京。僕等はどうも帰る氣にもなれず、といつて小林さんが動かなくては池にも行けず、又、沈澱。徳沢で毎日寝て暮らすのも悪くはない。

## 八月二日

料理番の腕前よく、小林さん大喜び。何しろ朝目をあければ飯になつて居り、食い終つて一ねむりして又目をさせば昼飯になつて居るのだから彼の喜ぶのも無理はない。小林、大崎、マンジュウを買いに明神へ行く。今日も衆議一決せず、のびる。

## 八月三日

かくては果てじと快晴に引きずられて、中村、大崎は大滝常念よりどこかへ行くことにし、長い事やらした徳沢の天幕をたたむ。一時半過ぎ、徳沢の河原にて別れる。まだ沈澱のくせが残つて居る為か全くファイトが出ず、大滝の源流近くで幕営。

## 八月四日

晴れて居るのに目をさましたのが八時。ぶらぶらしていたら出発十一時となつてしまひ、これはとても常念迄は行けないぞと猛あわてにあわててぐいぐい登る。大滝で飯を食

い、蝶へと出発。涸沢から見て居た時はあなたに平ならさぞ楽だろうと思つて居た所、樂だなどとは以つての外、案外な登りがあつたりして猛烈にへばる。その中雷が鳴り出し大崎さん早速ビヴァークせんと云ふ。ままとなだめてやつと常念の鞍部迄行き、水がない為沈痛なビヴァーク。木がよく燃えないのでにくさつた。

#### 八月五日

飯を食はぬ為フランフラしながら5時半起床。食ふものがない為にすぐ天幕をたたんで出発。常念の登りには全くグロッキーとなる。中村先に頂上に出て向ふを見ると女学生の一隊がすぐ下に居る。こいつは面白いと黙つて見て居たら、大崎氏さすがに照れて上つて來た。あの小屋で飯をと云ふ事になり、ゴロゴロの石につまづきつづ降り、常念小屋へ上り込み、山田利一にねだつて飯と汁粉を食ふ。急に里心がつき、始めの凄いプランもどこへやら、早速降る事にし、少し昼寝をしてから降る。一の沢にて幕営、二日分の飯を一度に食ふ。カレーを作り二つの飯盒に一杯たいて、一人で一つずつ

抱えて食つた所、少しあましてしまひ、残念がる。流石に二人とも動けなかつた。

#### 八月六日

九時頃出発して埃のひどい道を咽喉をガラガラにして柏矢町迄行く。松本では〈戦時統制のため〉ビール酒全くなく怒る。



1943年秋、本科3年の先輩たち（前列左から林、川村、佐藤、根本、山田、小泉、久保、および山田の後ろの森）を送る集まりで。最後列右から2人目が石井、3人目が中村讚治

#### 英國アルパインクラブ

創立150周年祝賀行事

—ツェルマットにて

中村 保（昭33年卒）

英國アルパインクラブ The Alpine Club は今年創立150年を迎えました。

ロンドンと湖水地方で祝賀行事が行われてきましたが、エドワード・ワインパーのマッターホルン初登頂（1865）の縁の地イスのツェルマットでハイライトとも言うべきイベントがスイス観光局の後援をえて盛大に行われました。行事は6月22～24日の3日間にわたり催されました。

その晴れがましい行事に夫婦で招待されましたので出かけてきました。さすがは伝統あるアルパインクラブとの印象を深めました。初日の22日はアルパインクラブ創立150年記念碑とワインバー像の除幕式、レセプションでした。往時、英國の登山家がベースとしたモンテローザ・ホテルの前の広場（教會の横）に「アルパイン・クラブ150年」

—ツェルマットとアルピニストの友好を記念して」と刻まれた記念碑とその横にワインバーのブロンズ像が作られました。

除幕式は楽隊が入り、ヘリコプターを使っての派手なパフォーマンスで行われました。

主賓として招待されたワルテル・ボナッティさんが、たまたまこの日が彼の77歳の誕生日なので記念品が贈られました。彼を含め15名のゲストにはジョージ・バンドさん編纂の豪華本『サミット——アルパインクラブの150年』が手渡されました。小生にも贈呈され



左からマクノート・デービス氏、中村、ワルテル・ボナッティ夫妻、中村元子



記念碑とワインバー像。中央はステファン・ベナブルス氏

ました。この本のフロントとバックの見開き

2ページに小生の「ヒマラヤの東——16の6000m未踏峰16座の写真」が載せられています。

6月23日は昼間はそれぞれ観光、夜は晚餐

会が行われました。場所はゴルナーグラートへ行く登山鉄道の途中駅標高2600mのリツフェルベルグ・ホテルで午後7時から11時半まで行われました。前日も含めアルパインクラブ会長のステファン・ベナブルスさんがホストの重責を果たしました。彼は欧州登

山界のプリンスです。

6月24日は英國教会にて物故会員（特にこの教会に埋葬された会員）の追悼が行われました。

祝賀行事への参加者は内外から300人。英國人が当然多数ですが、アメリカからはニコラス・クリンチ夫妻、カナダからマイク・モティマー（現UIAA会長）、イタリアからボナッティ夫妻、オーストリアのクルト・ディーンベルガーなどが出席しました。

アルパインクラブから会長、ジョージ・バンド、今や伝説的なクライマーのダグ・スコットなどなど。南アフリカからの参加もありました。アジアからは小生とインド・ヒマラヤンクラブから一人だけでした。ゲストとして招待されたのは15人です。ボナッティ夫妻、

イスス山岳会会长および理事長、フランス山岳会会长、ヒマラヤンクラブ理事、ツェルマット・イタリアのガイド及びフランス登山学校のそれぞれの代表、アメリカン・アルパイン・ジャーナル編集長ジョン・ハーリンIII、ダグ・スコットとサイモン・イエーツなどで、栄誉なことに小生は日本山岳会の代表として加えられました。

思いがけなかつたことは、ボナッティさんとの46年ぶりの再会でした。1961年に一橋大アンデス登山隊に参加した時、ペルーの

リマでボナッティさんとアンドレ・オジヨーに何度か会つて以来ですが、よく覚えていてくれました。その年、彼らはワイワツシュ山群とロンドイを初登頂、我われはブランカ山群のプカヒルカ北峰を初登頂しました。

帰国後、彼らはモンブランでアルプス遭難史上有名な事件に遭遇しました。モンブランのフレネイ山稜の初登攀で明暗を分け、ボナッティさんは生き残りアンドレ・オジヨーニは死にました。その頃のことを奥さんのロツサーナ・ポデスタさんの通訳で親しく話しあうことができました。奥さんはイタリア映画界の往年の銀幕のスターです。中年の方ならご記憶でしょう。「トロイのヘレン」でデビューした美女です。思いがけない楽しい時を過ごしました。

本格的な登山に備えて革張りの登山靴を眺えたり、馬鹿でかいキスリングやピックルやアイゼン、寝袋など、生まれて初めて手にするものを心をときめかせながら手当てしたあの頃が懐かしい。

最初の本格的な合宿は谷川岳だった。ピックルやザイルの使い方をみっちり仕込まれながら一の倉沢を登つて頂上に立つた。日はとっぷり暮れ星を仰ぎながらの下山だった。僅かな休憩時間でも腰を下ろすと瞬間に吸いこまれるように眠ってしまうほど疲労困憊しきっていた。山岳部のしごきのすごさを思い知った合宿だった。

次の山行は松原湖から歩きはじめ夏沢峠を登つて硫黄、横岳、赤岳、編笠、小淵沢駅までの八ヶ岳完全縦走だった。途中のことはあ

りの山岳部の部活動でしたが以下その時の思い出をしたためることで自己紹介に代えさせて頂きます。

昭和32年4月の入学式当日、国立の正門でボート部からも強い勧誘を受けたが、浪人時代に高校の親友から山登りの楽しさを教えてもらっていたこともあり山岳部の方に入部した。早速山岳部の部室で先輩諸氏から湯飲み茶碗になみなみに注がれたウイスキーで手荒い歓迎を受けたのを鮮明に覚えている。歓迎登山は乾徳山だった。

本格的な登山に備えて革張りの登山靴を眺

えたり、馬鹿でかいキスリングやピックルやアイゼン、寝袋など、生まれて初めて手にするものを心をときめかせながら手当てしたあの頃が懐かしい。

秋の合宿は冬山合宿のためのボツカ登山だつた。涸沢経由で穂高へ荷揚げした。担がされた一斗缶からこぼれ出た灯油で背中が火傷を負つたのを覚えている。

春合宿は馬場島にベースキャンプを張り、剣頂上アタック隊をサポートするため前進基地の設営とそのボツカを行つた。腰まで埋まる雪の中を先頭でラッセルさせられたときのきつさは今も忘れられない。

家庭の事情もあって僅か1年で退部のやむなきに至つたが山岳部時代は短いながらも鮮烈な青春の一ページとなつた。

今年6月26日の針葉樹会の総会で入会を認めて頂きました仲田修です。僅か1年ばかり

まり記憶にないが編笠の下りがやけに長かつたことだけはなぜかよく覚えている。

夏合宿のキャンプは剣沢で張つた。生憎入

山初日から連日豪雨にたたられ水浸しのテントの中で先輩にそそのかされて紙麻雀でタバコを賭けて時間をつぶしたのを覚えている。

これがタバコを吸うきっかけとなつた。そのあと源次郎尾根を登つて剣の頂上を極め、さ

らに五色ヶ原、平ノ小屋、針ノ木谷を遡つて針ノ木岳に登り葛温泉に下りたよう記憶す

る。長い合宿がやつと終わつたという開放感から葛温泉では浴びるよう酒を呑んで苦しんだのを覚えている。

山岳部時代の思い出

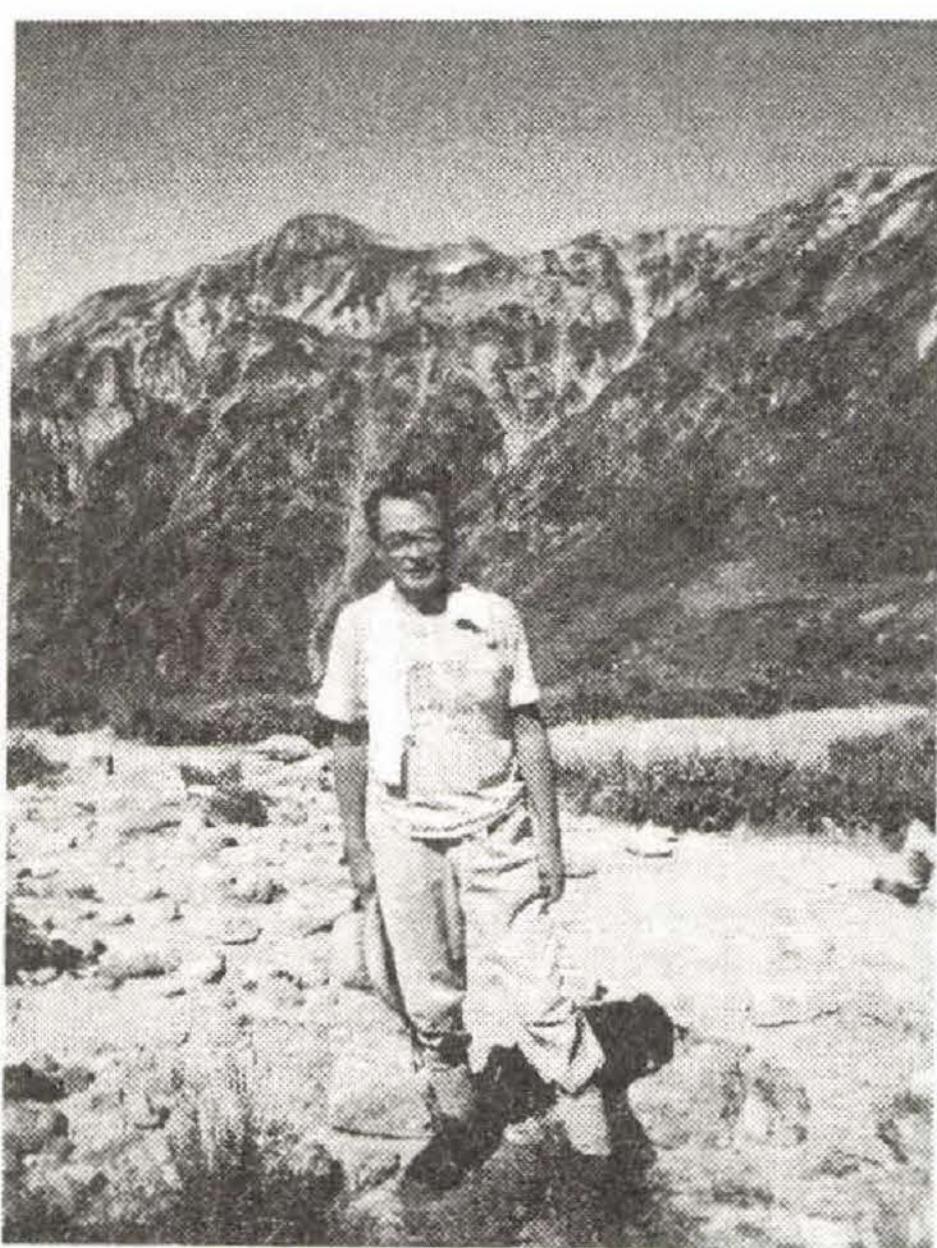
仲田 修（昭36年卒）

た。今は月1、2回のペースで奥多摩を中心  
に登っているが、最近は高山植物を楽しんだ  
り登った後で温泉に入り一杯やるのが楽しい  
ので山を登っているという感じである。

## 2007年の会心の山

三井 博（昭37年卒）

私と同世代の登山家に佐伯邦夫さんがいる。佐伯さんは富山県魚津市の出身で、お兄さんの佐伯郁夫さんとともに魚津山岳会を創立し、剣岳を中心とした北アルプス北部の山や頸城の山々に登つており、山行記に『会心の山』がある。もちろん天候やザイルパーキングに恵まれ、幾多の困難を乗り越えて頂上までは目的とする地点への到達に成功した山行ばかりではなく、苦労の末に失敗した山行や遭難寸前に至つた山行も多く記述されていて、それらが『会心の山』のメリハリとなつて、流暢な文体と共に優れた山行記となつており、私の愛読書の一つである。



笠ヶ岳をバックにした三井

のような佐伯邦夫さんには失礼であったが、  
その『会心の山』の題名を借用して「200  
7年の会心の山」とした。  
しかし、2007年に私が登つた山は、北  
高尾山稜、丹沢主脈縦走、鳳凰三山、鳥海山、  
北アルプス笠ヶ岳などで、月一回のペースに  
もなつていない。その中から一番最近に登つ  
た「笠ヶ岳」を選んだ。

8月14日の明け方に新穂高温泉でバスを  
下り、笠新道の登山口まで約1時間歩く。真  
夏の水のない尾根を登るので、水3リットル  
を補給する。この登山は毎日新聞旅行のツ  
アード、リーダー、添乗員を含めて総勢28名  
の大所帯であり、うち12名が女性である。

二度と登りたくない、という噂のある笠新  
道の急坂を朝5時から登りだす。すぐに汗が  
噴出し、とにかく暑いが、皆黙々とリーダー<sup>1</sup>についてゆく。時々樹林が切れて風に当たる  
とホツとする。左後方に大きな団体の焼岳が  
見え、その奥に乗鞍岳がのっぺりと高く見  
える。

リーダーは40～50分に一度5～10分程度  
の休憩をとる。歩調はあまり早くなく普通で  
あるが、とにかく登りが長い。途中で下りの  
パーティをやり過ごすために休憩をとり、そ  
の際大きく深呼吸してハーハーとしていた  
ら、「あんたこんな所でハーハーしていたら、  
とても上まであがらへんよ」と大阪弁のオバ  
サンに云われた。

3時間半の急登をこなすと、笠ヶ岳が見え  
る展望台があつた。遠くから眺める笠ヶ岳は  
富士山のような円錐形の綺麗な山であるが、  
ここから眺める笠ヶ岳は、頭をピヨコンと出  
した形で、三俣蓮華岳に似た趣である。まも  
なく杓子平という草原状の広い平らなところ  
に着いて、昼食を含めた大休止をとる。笠ヶ  
岳から抜戸岳に長い尾根が延々と続いてお  
り、まだこの先の苦労が思いやられる。焼岳  
はいつの間にか下の方に見えた。

杓子平から大きな岩がごろごろした急な道  
を尾根を目指して登るが、疲れもあり登り難  
かつた。この登りで一人の男性が大きく遅れ  
たが、添乗員が付き添い、その他の人はリー

ダーニ従つて先を急ぐ。抜戸岳への分岐点着が11時。反対側の打込谷から涼しい風が吹き上りてきて、爽快な気分になる。

ここからはならかな稜線を笠ヶ岳を目指して進む。アップダウンはあるものの快適な縦走である。先が見えてきたので、リーダーはペースを落としてゆっくりと進み、笠ヶ岳山荘着が13時30分。一息いれてから、空身で笠ヶ岳頂上に向かう。14時頂上着。登山口から9時間かかった。天候は快晴で、特に西穂高から槍ヶ岳にいたる岩稜が綺麗に見えた。尚、大幅に遅れた男性は、約1時間遅れで山荘に着き、添乗員と共に頂上を踏んだそうである。彼は70歳で最高年齢であるが、深田百名山97座目で、あと3座なんとしても今年中に達成したいそうである。その理由はツアーの年齢制限が70歳までとなつており、今年を逃すと、一緒に登つてくれる人がいなくなるからだとのことであった。女性陣はいたつて元気で、上越の荒沢岳の話になつたときは、「思つたよりも簡単でしたよ。もつとも男性は何名か頂上にこれなかつたが、女性は全員完登しましたよ」とのことであった。

我々は早めに山荘に着いたので、大きな山荘はガラガラであつたが、まもなく後続のパーティが続々と到着して満杯となり、二人分の寝床に三人寝ざるを得なくなつてしまつた。きついが真夏の真っ最中ではいつものことであり、仕方がない。食事は山小屋の中では上等の部類である。売店なども充実しており、サービスも良好であった。トイレは例の如く苦労したが。

翌日も快晴で、4時起床、5時朝食、5時45分に下山開始する。早朝の足は速く、杓子平8時着、登山口着が10時15分であつた。添乗員から昨年は下りに7時間かかつたが、今年は5時間半であり、今年の人は健脚である、とのお褒めの言葉を頂いた。登りに大きく遅れた男性も下りは遅れずに、皆と同時に登山口に帰つてきた。

ここから新穂高温泉までの林道は各自ばらばらに歩き、新穂高で昼食、平湯で入浴を済ませ、バスで新宿に帰つてきたが、道路渋滞により延々と8時間もバスに乗つていた。

今回の登山は、8月12日に法事が入つたため昨年の続きの八海山・丹後山の山行に不参加せざるを得なくなつた。そこで14日からの笠ヶ岳に急遽申込み参加したものであるが、ストックを持ち忘れたり、体調も万全とはいかななかつたが、特に支障なく笠新道を往復することが出来た。まだこの程度の山ならば何とか大丈夫そうである。

これが、現在のところ、私の「2007年の会心の山」である。

## 伯耆大山——失敗の蜜

倉知 敬（昭38年卒）

「雪の大山に登つた話を書いてくれ」と、この度新任の編集幹事小島さんから頼まれた。昔から会報には関心を抱きその発行には協力を惜しまぬ気持ちを持ってきたので、頼まれればいつでも寄稿するに吝かでないが、あの山行は計画通りには行かなかつた不本意なものであり大して書くこともない。そもそも会報は会員誰もが幅広く書いてこそ意味が深まるものであり、縁あつてこれまで比較的書く機会の多かつた私などがあまり取柄の無い登山について紹介するより、なるべくまだ登場機会の少ない会員に執筆依頼してはどうか、というような返事をした。編集幹事の重要な役目は、書きたがらない人に如何にして書いてもらうか、というところにあるのだ。しかしそれはあまり理解されたようでもなく、協力を旨とする立場であるので、ともかくも以下に何がしか書き連ねることにしたい。

今年（二〇〇七年）の四月初め、山本尚禎

のである。

さん、本間浩さんと私はたしかに、麓の大山寺から雪を踏んで一般登路の幅広い北西尾根伝いに弥山先の三角点（一七一一m）まで登つた。ほぼ全行程、前日に降った季節外れの大雪で積つた新雪を踏んでの登行であり、雲は多いがまずは安定した天候に恵まれ、初めて見る周囲の雄大な景観を楽しんだ。三角点から先には切り立った雪稜が最高峰の剣ヶ峰まで伸び上がっており、雪の大山を登る核心部はその綺麗な雪稜を辿るところにあるのは明らかだつたが、その日ザイルも持参して来なかつた三人の胸にはそんな気分も湧かず、ただ眺めて満足して往路を引き返し、尾根の途中から北面の元谷に下つた。

実は当初の計画では、南面の三の沢をつめて剣ヶ峰に達する目論みだつた。崩壊の顕著な大山では、崩落を食い止め足元を安定させる適度な積雪が期待できる時期こそ最も安全に登ることが出来るのであり、残雪期の三の沢はその位置や傾斜から考えて最適のルートのように思われた。大山の周囲には高度千メートル前後のあたりに観光道路が張り巡らされているが、その沢の麓を横断する部分は例年四月初め頃になつてやつと開通するという事情を知り、今年は寡雪もあるので残雪状況を勘案して、開通直後を狙つて出掛けた

四月四日早朝、空路出雲空港に到着してレンタカーに乗車、宿とした宿坊山楽荘に立ち寄つてから、直ちに大山環状道路に入り三の沢を眺めに行く。ところが、宿を出る頃ちらほら舞い出した小雪が見る見る猛烈な大雪となり、ずっと登り気味の路面はあつという間に真っ白な雪面と化し、車のスリップが怖いので途中で引き返すしかなかつた。その日、あとは観光気分で比較的高度の低い部分を走る北側の道路を走つてみたが、雪はシンシンと降りやまず視界も数メートルという夢幻のごとき白い世界を行くばかり、車はどうとう坂道や曲り角に来るとスリップをし始め、ハラハラのし通しのうちにどうやら宿に戻ることが出来た。その後、夜になつても降りやまぬ大雪となり、新雪は二〇センチも積つたらどうか、翌日向うつもりだつた沢伝いの登路は、アプローチ難と雪崩リスクで不可能となり、仕方なく代りに新雪積る一般道から、前述のごとく登つてみたのだった。

その後、夕暮れまで車を駆つて大山の南面を思うがまま観望ドライブし、翌日には鳥取方面に向かつて北面を巡るなどして、大山をぐるりと眺めて回つた。周囲から突出して聳える雪の大山は、折から穏やかな早春の緑の大地から際立ち、どの角度から仰いでもそれぞれに特徴的な、まことに感動的なたたずまいを見せる。山は登るものでなく眺めるもの、とも思われるばかりであつた。

大山は火山だから円錐形が基本の山容のはずであるのに、見回してみるとその面影があるのは西側の一般登路のある広い斜面だけであり、そこ以外は北も南も峨々たる岩壁が連なる。この両側の岩壁を劃すやせ尾根が東西に伸び、真ん中に最高峰の剣ヶ峰があるのだ。無雪期には全山崩落がはげしく、一般に弥山から先のそのやせ尾根は入山禁止とされており、谷筋に至つては当然落石の危険があるから普通は谷に入らない。だから大山という山は、積雪期に登るのが一番適しており、そ

状道路を走つて三の沢を見に行き、沢の出合で車を下りて少し沢伝いに雪を踏んで登つてみた。浅めの谷筋には、一筋に続く雪の斜面が稜線まで伸び上がつていて、あそこをこう登つて、と目で大体の登路を追いかけてみたが、雪の状態が良ければ難なく登れそうに見える。

れも雪稜を延々と辿るより谷筋を詰めて頂稜に直登するのが一番楽だという、実にユニークな山である。日本の山はどれも、まず歩けば頂上に至る登山道があるという山ばかりだが、本当の頂上に達するまともな道が無いという山はこの大山ぐらいのものだろう。伯耆大山は、地理的に遠隔の地にあり普段見慣れないという珍しさだけでなく、登る対象の山としてなかなか個性的なのである。

登山の醍醐味は積雪期の登攀にある、それには最早年老いて体力及ばずといえども、残雪期に沢をつめるなら樂に登れよう、そう考えてこのところ登り甲斐ある雪の沢を物色してきた。去年は幸い天気と仲間に恵まれて、穂高・岳川谷扇沢、剣・長次郎沢という正に求めていたものズバリの登山を実現し、会報108号にもその顛末を述べたところである。その続きで、まず今年の目標に置いたのが伯耆大山・三の沢だったのだが、前述のとおり選んだ日程が大雪の日に当たり、沢は見ただけで終わつた。この大山行は、ついでに僻遠の山陰地方を巡る旅にしようとして、レンタカーで神社・遺跡などの梯子観光から、出雲大社の岡垣先輩訪問、おまけの三瓶山登山まで、貪欲に駆け回った大旅行でもあった。これを語ると切りがなく会報に相応しい話題で

もないで触れないが、それは昔の辛い合宿で悪天に妨げられてテントで停滞する時のような、甘い味のする体験でもあつた。

その次に同じ発想で目を付けたのが、拔戸岳に突き上げる蒲田川左俣谷支流・奥拔戸沢だ。この高差約千メートルの直線的に切れ込んだ沢は、すつきりと頂上付近から切れ落ちており、八月下旬撮影の航空写真を見てもまだかなりの雪渓が残っている。残雪の沢と

いつても、山奥でアプローチが大変だと、近くに山小屋などなく軽装で行けない、となると困るのだが、その点蒲田川本谷から手近かな位置にあり付近に小屋もいくつかあるという抜戸岳付近は、実に条件に適うのである。時期は梅雨明け直後が良かろうと計画したが、待つた挙句選んだ八月初めの日に折しも大型台風到来、それでもその朝東京駅に集合した三森、金子、私の三人は、家は出できたものの強行する程の意欲もなく、顔を見合わせるばかりだった。

日程延期の再起案にはお互いかと都合つかないので、とにかく台風の影響の少ない方面に行つてみると、その日は思いつきで三森さんの日光の別荘に向かつた。車を走らせることほど、天気は雲多いもまた安定しているので、そのまま中禅寺湖までドライブし、夏休みなのに閑散とした日光高原から、於呂俱羅山(二〇二〇m)と言う道無き藪山に登つた。山王帽子山とその山との間の峠から尾根伝いに藪をかきわけて登つたのだが、そのあたりは、大昔の日光山地は斯くのこときか、と思わせる雰囲気もあつた。更についでに、そのあと避暑がてらの日光界隈山岳ドライブや滝巡りも楽しみ、それはそれで思い出の夏を過したのだった。

登つたら得をするとか、ひとが褒めてくれるわけでもなく、登山は自己満足の行為に過ぎないのだから、面白くなればやる意味もないだろう。そうでなければ、気の利いた観光旅行のほうが増しということになる。

最近は、どの山に出かけるにしても大概はかつて来たことがある山となり、往々にしてかつて一緒にそこを登った仲間は既に故人となっているという場合が多い。登りながら感傷を感じるのだが、それら故人の人々にとつて没後にして登山の意味したものは何だったのだろうかと、思いを馳せてしまうのだ。彼らは死に、私はまだ生きていてこうしてまだ同じ山を歩いているが、遅かれ早かれ自分もそうなる。いまや魂が、好きだった山のあたりに漂っているのかもしれないがどうもそうとは思えず、やはり人は死後、無に帰しているのである。自分も無に帰する前に登る山は、生きている瞬間を楽しむだけのものであるはずで、面白いと感じることだけが意味あるのじやないのか、などと思うばかりだ。

今年は駄目だったが、来年まだ生きていたら、まだ五体満足だったら、三の沢でも奥抜戸沢でも、また似たようなところでも、今一度登ろうとしてみようかと思つてゐる。どなたか、ご一緒して下さる方は居ませんか？

## ドッケ・シリーズの山

蛭川 隆夫（昭39年卒）

有名な三ツ峠山の「tooge」と雲取山の北にある芋ノ木ドッケの「dokke」は、語源が共通である。kとgは、ともに軟口蓋破裂音で発音が移行しやすい。tとdも、同じ歯茎破裂音で発音が混同されやすい。例えば、韓国人は語頭の「どうしても（理解できない）」を「とうしても」と発音しがちだ。ooの長音とkkの促音もまた混同されやすい。そういう音声学の理屈を背景に、toogeとdokkeがともに朝鮮語トック tokk（意味は「突き出る」）に由来するのである。

こうして、渡来人が移り住んだ地域、「こま」の地名が分布している地域、トック、ドッケの付く山名がある地域が、みごとに重なり合う。日本百名山踏破後の山登りのテーマを探していた私は、これはおもしろいと感じ、このドッケ・シリーズをトレースしようと思いつた。

最初は、2006年1月に本間さんなどと行つた長沢背稜～雲取山～飛龍山の縦走。そのとき芋ノ木ドッケには登つたが、三ツドッケ（天目山）と黒ドッケ（西谷山）は、「早く小屋に入つていっぱいやろうよ」という本間さんの誘惑に負けて、頂上を踏み損ねてしまふ。その後述するように、甲・武・相州の方言

としての外来語）ができた。こうして、トック、ドッケは、槍ヶ岳や富士「山」などとならんで、高「ドッケ」のように山名を表示することばになった。

高句麗（ひいては朝鮮半島）を、古代の日本人は「こま」（高麗）とよんだ。高句麗からの渡来人の一部は、関東地方に入り、各地に「こま」の地名を残した。例をあげると、武藏国（山崎さんによると、高麗山という山もある）、甲斐国（巨摩郡など）。箱根の駒ヶ岳も、もともとは高麗岳だったらしい。そして、これら三国には、朝鮮語 tokk を起源とする××トック、××ドッケの山が存在している。

tokk（トック）は、高句麗の滅亡（668年）前後に、高句麗遺民（渡来人）が日本に持ち込んだ。子音終わりの tokk（トック）は、母音終わりを特徴とする日本語に取り込まれる過程で、母音のeが補われて tokke（トッケ）に、さらに訛つて dokke（ドッケ）などになり、ここに peak を意味する外来語（とはいえ、後述するように、甲・武・相州の方言

まつた（その後、三井さんとこのあたりを目指そうと合意したが、まだ実現していない）。

次は、2007年2月の北高尾山稜。この縦走路は甘利さんのトレーニング・コースだつたと佐薙さんから聞いて興味をそそられたが、同時に、ここには大ドッケと黒ドッケがあるのでぜひ登りたいと思った。山崎さん、三井さんなどと、小雪がちらつく中をこの長い稜線を歩いた。大ドッケの頂上は粗末なプレートで確認できたものの、黒ドッケは「何時の間にやら通過してしまった」（三井さんの HUHAC の投稿）。

三回目は、高ドッキヨウ（静岡・山梨の県境）。これは、（子細は省くが）山登りに出掛けて登山靴を紛失するという珍事を起こして、登れなかつた。

四回目は、2007年4月に登つた大ドッケ（奥武藏の浦山川沿いにある）。スズタケの藪こぎにひさしぶりに苦しんだ。この山は、昭文社の地図にあるのだがその発行年によつて地図上の表示位置が違う。登山後、どちらが正しいか同行者との間で論争になつた。論争に決着をつけようと調査している過程で、同行者の尽力で、展望図・鳥瞰図で有名な藤本一美氏（『山岳展望』の著者）と知り合つた。藤本氏は、昭和25年の「奥武藏研究会」会報に掲載された「浦山谷を繞る山々」（大石眞

人）を見てくれた。そのガリ版刷りの貴重な資料によると、地元古老に聞いて大石氏が図示した大ドッケは、なんと昭文社のいずれの地図とも違う。謎が深まつたが、大ドッケの山麓には野生の福寿草の群落があるというので、その花時に福寿草観察を兼ねて「真の大ドッケを再訪したいと思つていてる。

五回目は、ササドッキヨウとドッキヨウ山。これらは、あるドッケ関係の本に八ヶ岳の西麓にあると書かれているが、地形図・昭文社地図・ガイドブックをあさつても出ていない。インターネットの検索でもヒットしない（珍しいことだ）。

思いあまつて著者に問い合わせたら、なんと著者自身から「昔出した本なので今はわからぬ」という返事。意地になつて地元の各役場に電話を掛けまくつたら、原村の教育委員会の方が地元の郷土史家・牛山甲子恵氏を紹介してくれた。電話口の牛山氏は、室町時代にまで遡る地名だと教えてくれた。しかも今年のゴールデンウイークに案内してもらつたら、どちらの山も原村が造成した別荘用地の中のちよつとした高台と化していた。こうして、昔の名前は失われてゆくのかと感じた。

六回目は、やはり今年の6月のトケ山。標高こそ507mだが、奥多摩駅からも望める

銳峰だ。今は、地図やガイドブックで愛宕山と名を変えている。これは、先の藤本氏が復刻した名著『奥多摩』（宮内敏雄）に出ているもので、愛宕山は昔はトケ山と呼ばれていたという。山麓の集落は、今なお登計という地名で、昔からのいわれを残している。

さらに調べてゆくと、芋掘ドッケン（両神山の尾根の一角）、川上ドッケ（相模湖の近く。三井さんが教えてくれた）、丸ドッケ（奥多摩）、大ドケ（奥多摩・小菅村）などなど、ドッケ・シリーズの対象には事欠かない。高デッキ山（長野県・高妻山の近く）、トッケイ峰（糸魚川市）、黒トッケ（福島県・南会津）、沼ノトッケ（福島・新潟の県境）、小幽沢ドッケ（会津朝日岳の近く）、与蔵ドッケ（山形県）などもある。もっとも、この辺になると、渡来人が移り住んだ地域といふ定義からは外れる。さて、冒頭にあげた三ツ峠山は、峠 col (pass) が三つあるからそう命名されたのではない。三つあるのは、開運山（岩登りゲレンデの屏風岩がある）・毛無山・御巣鷹山の peak である。江戸時代の『甲斐国志』にも、「其峰ハ奇岩峨々トシテ三峰ニ秀ツ、故に三峰ト云」と書かれている。ここで注意したいのは、三峰であつて三峠山ではないこと、すなわち峠 peak だということ。後世になつて、山名が峠 col で終わるのは据わりが悪いと勘違いし

た人が、末尾に「山」を付した。今や、三ツ峠山と表記するのが主流となってしまった。

同じような三ツ峠の例が、南アルプスの悪沢岳である。深田久弥氏は、その『日本百名山』で、次のように書いている。

古記に「赤石山ハ絶頂三岐シ、荒川・鍋伏・赤石岳ノ三連峰ヨリ成レル故ニ、旧名ヲ三ツ峠と言ヒ……」とあるが、おそらくこの鍋伏が悪沢岳を指したものであろう。

荒川（現在の中岳と前岳を指す）・悪沢・赤石の三巨人を三ツ峠として一括する視点にも驚いたが、「古記」とは何かも気になった。亡くなつた山本さんが『駿河国志』かもしけないよとサジェストしてくれたので、静岡市立図書館や「深田クラブ」に照会したが、今もつて回答が得られていない。

峠と名乗つっていても col ではなく実は peak であるという例は、他にある。奥多摩の仙元峠はあきらかに peak である。佐薙さんの「グルリ丹沢」のファイナーレ山行に参加させてもらったとき、山中湖畔の民宿に三国峠まで車で送つてもらつたが、そのとき運転手のおじいさんに「今の三国山は昔は三国峠と呼んでいませんでしたか」と聞いたら「そのとおり」との回答。こちらの質問の真意を理解しての答だつたかどうか一抹の不安が残るが、ここでもまた峠は peak である。三ツ峠の場合

は三ツ峠山と「山」を追加したが、三国峠の場合は三国峠を三国山に変えた（「峠」をとつて「山」を付した）。そして、あらたにできた三国山に連なる尾根の最低部に、三国峠の名前を移した。

峠というと、天城峠のように、こちら（修善寺側）とあちら（下田側）が往来するための稜線上の最低部 col を指すと思いがちだが、実は peak もある。このことを日本語教師仲間との勉強会で披露したら、出席者の一人から、峠は col を指すとするのがむしろおかしい、その証拠に「高熱も『どうげ』をこえた」は体温が最高点（peak）を過ぎたということではないかと言つた。これには、正直などころ、今なおうまく反駁できないでいる。

なお、山岳地名に限らず、漢字あるいはその音読みにとらわれて物事を判断するのは危険である（中国から漢字を導入するずっと前から、音声言語としての日本語は存在したのだから当然だ）。「峠」は「袴」と同じく国字（日本で発明した漢字）だから、なおさらそうだ。もつとも、国字であるがゆえにこの漢字には音読みはない。峠という漢字が発明されたのは何年頃か、調べてみたい。

もしこの漢字の発明が朝鮮語 tokk の伝来（7世紀）よりも前なら、「とうげ朝鮮語起源説」は成立しないことになる。

まとめると、トッケ（ドッケ）もトウゲも、朝鮮語 tokk を共通の祖語とする言葉で、いずれも peak を意味するのだ。もし本当だとしたら、おもしろい話ではないか。

た。8月に登ると決め、7月に笠、乗鞍、御岳の3山を登り飯豊にそなえた。

蛭川さんがお祝いをかねて同行しましようといつてくれ竹中さんも参加してくれることとなつた。あと蛭川さんの山友達2名と日高をこよなく愛し毎年登りにこられる仙台の松野「病院長」先生夫妻と7人で食料7食分、シユラフ、水を背負つての縦走となつた。蛭川さんにおんぶにだっこで食料、会計担当をしていただいた。ありがとうございました。

#### 8月19日（日）

前日、小国駅からジャンボタクシーで飯豊山荘へ。5時出発。稜線まで標高差1500mもある梶川尾根に挑戦。うすぐもりの中を7時間あえぎながら汗をかきかき登る。梶川峰をすぎるあたりからマツムシソウ、ウメバチソウ、イブキトラノオなどの花々に疲れをいやされる。門内小屋で昼食、気合を入れるためビールを少々——。

14時15分ガスのなか北股岳2024m。15時前に梅花皮小屋着。重いザックから解放される。

#### 8月20日（月）

雷雨の中5時20分出発。6時20分鳥帽子岳2017m。雷が怖いので頂上より下で休む。ピカ、ゴロの中ひたすら御手洗の池、天

狗の庭を通過。9時20分御西小屋着。雷雨遠ざかり一安心。ザックを小屋の外に置き雨具をぬいで小屋で大休止。飯豊の最高峰大日岳2128mは空身でも往復3時間30分はかかるとのこと、雨はあがりかけたが濃いガスのため中止。

10時20分、飯豊山にむかう。ガスも少しずつ切れお花畠で大休止して花を愛てる。雪渓もところどころ残つていて。12時15分飯豊山2105m登頂。念願の百名山目となつた。みんなと感激の握手。13時、本山小屋でビールでお祝いしていただく。

夕方ガスの晴れ間に大日岳、杣差岳を見る。日没直前に影飯豊をみることができた。東北の山にくわしい松野先生でもめつたにみれないとのこと。

#### 8月21日（火）

今日もガスのなかの一日、そのかわり涼しい。5時30分出発、滑りやすい岩稜地帯を注意深く下り、御秘所、姥権現をぬけ7時5分、切合小屋。種蒔山、七森を経由して8時45分、三国小屋着。長い長坂をひたすらくだり12時45分、無事川入キャンプ場へ。宿のバスで人情温泉「いいでの湯」へ。シャンパンで再度お祝いをうけ温泉、生ビール、地酒と下界の喜びを満喫した。

### 百名山完登のみちのり

高校2年、16歳の夏休み課外コースで富士山に登る。50年かけて66歳で百名山完登できた。

百名山も大学山岳部に入つたことで実現できた。体力、気力、時間がなくなる中高年では北アルプス、南アルプスは難儀である。大學卒業まで30山登れたが北海道電力でサラリーマン生活を送つた52歳までには北海道の山を中心に8山しか登つてない。20歳代5山、30歳代2山、40歳代は仕事が中心となり登れず。50歳代でやつと1山であった。

第2の人生はグループ会社で東京勤務、しかも単身赴任、道外の登つてない山を会社の山好きな車を持っている友人と58歳までに29山登れた。59歳で札幌本社勤務となり時々上京し定年までに13山登る。自由の身になつた時点で20山残すのみとなつた。

### 蛭川さん、高橋さんのおかけ

先に百名山を完登した蛭川さん、高橋さんには大変お世話になつた。車を出していただき蛭川さんや高橋さんの百名山に同行していくうちに私の山行数もふえていった。後半はわたしの登つてない山を計画し車で連れて行つていただいた。宮之浦岳、大山、剣山、石鎧山、大台ヶ原、大峰山、白山、白馬岳な

どは到底私ひとりでは無理である。あらためて感謝申し上げたい。

蛭川さんとはなんと22山も、高橋さんは7山お世話になった（大学時代を除く）。あと針葉樹の会員のみなさんにもお世話になり故山本さん、有賀さん、竹中さん、本間さんは3山。故大塚さん、川名さんは2山。宮本さんとは1山同行していただいた。

単独行は10山、旅行会社のお世話になつたのが2山（若い頃の雌阿寒岳と平が岳）である。

### おわりに

なんで百名山との声もあるが、自分なりに目標を立て深田さんという先達が推薦してくれる山をめざすのも楽しい。それにむかって自分の体力を低下しないような工夫をつみ重ねる日々を送り、その上で達成できた喜びは仕事での達成感とはまた違つたものである。これからは自分の体力にあわせた山を選び楽しく老後をすごしたいと思っている。

## 八海山縦走

本間 浩（昭40年卒）

分（岳力）不相応な、年（66歳）不相応な山登りをしたものだと思っております。八海山・中ノ岳間の長い縦走路と猛暑、40・9度の激暑の3～4日前がこたえました。

「八海山」は酒でお世話になつてますので、山にも表敬訪問せねばと思つていきましたところ、昨年三山の二角、駒ヶ岳・中ノ岳縦走の話があり早速参加しました。4リットルの水を持ち檜廊下のヤヤコシイ木の中をくぐり抜けアップダウンを繰り返す難儀な山でしたが、途中目にした三角錐の荒沢岳、八海山から中ノ岳にかけての登降差の大きい稜線は印象深いものでした。

そこで今年は三山縦走の残る一辺、八海山から中ノ岳へ、昨年行けなかつた丹後山経由で十字峠に下りようということになりました。メンバーは昨年参加の佐薙さん、三井さん代わり高橋さん、西牟田さんが、連続組の竹中さん、川名さんと私の5名となりま

8月11日（ロープウェイ駅→千本檜小屋）  
暑さもホドホド、道もほぼ登り一本でアツプダウンもなく、時間通り小屋へ。

高橋、西牟田、川名の三氏はハツ峰へ。竹中、本間はビールを飲みながら留守番を。帰着後、小屋の前で酒を飲みながら歓談。夕食後早めに就寝。

### 8月12日（小屋→入道岳→中ノ岳避難小屋）

4時起床、朝・昼のおにぎり4個を持って5時出発。コースタイムで12時間、20～30代で9時間弱、我々の年齢からすると14時間前後か。午後7時頃暗くなる前に着けば御の字、ヘッドランプは勘弁して欲しいと思う。ハツ峰は捲き道をとはいえ、鎖場が数ヶ所あり、特に最後の稜線に出るところは急で長い。八海山最高峰の入道岳で朝食。はるか向こうに中ノ岳が見えるが、そこまでは600メートル下つて900メートル登らねば、祓川<sup>はらいがわ</sup>で水が汲めるのでそこまでたどり着けば。ガレ場を阿寺山分岐の五竜岳へ下る。行くか逃れるか最後の判断場所だが。ただここまで暑さもさほどでなく比較的順調だったが、この先オカメノゾキまで下り調子だが小さな小山をいくつか越えるシンドイ道が続く。暑さも本格的になつてきた。30分ピッチで木陰を求め

した。



左から本間、竹中、高橋、西牟田。越後駒をバックに兎岳と丹後山の間の稜線上で

わけではないのでおにぎり、クラッカー、チーズをとにかく水で流し込む。少しづつ遅れだし、出雲先の鎖場では腿がつりかけたのでレッドキックホットを塗りしばらく休んで、また歩き出す。その後、足には支障なくもっぱら空腹をだましまし登り続けた。この辺は記憶も定かではなく多分、午後2時か3時だと思うが今日はとにかく小屋に着けばいいぐらいの気持ちで歩いていたと思う。

御月山の鎖場のあたりからやっとこの先が見えてきた。御月山から祓川に下り水を飲んであと300メートル登れば小屋に着く。体はともかく気持ちは落ち着いてきた。

三人パーキーが祓川から中ノ岳へ登つていながら見えた。先行三人組のようだがそれにしてもかく気持ちは落ち着いてきた。

ゆっくり休みをとる。

中ノ岳への最後の登り、300メートル一時間とみたが、休みを入れて1時間30分かかり、午後6時過ぎやつと避難小屋に着いた。朝5時に出て、夕方6時に13時間かかってやつと着いた。暑くて長いツライ一日でした。

祝い酒を軽くいただき定番のカレーライスで夕食。単独行三人が同宿のため8時に就寝。よりだ。

このあたりから腹に力が入らず休み毎に何か食わないともたない。とはい食用がある

わけではないのでおにぎり、クラッカー、チーズをとにかく水で流し込む。少しづつ遅れだし、出雲先の鎖場では腿がつりかけたのでレッドキックホットを塗りしばらく休んで、また歩き出す。その後、足には支障なくもっぱら空腹をだましまし登り続けた。この辺は記憶も定かではなく多分、午後2時か3時だと思うが今日はとにかく小屋に着けばいいぐらいの気持ちで歩いていたと思う。

丹後山までは大きな登り降りがなく、昨日に比べれば穏やかな山歩きで、周囲の山々、荒沢岳、平ヶ岳、巻機山と見渡す余裕があった。もつとも暑さも暑さでしたが。

丹後山から十字峠へは短いだけあってなかなか急な降りで、膝を痛めないようにゆっくり歩く。登りには使いたくないルートです。やっと登山口に着いたが、この先長く暑い車道歩きがあり十字峠小屋へ。

乾杯のビール、お風呂、お酒と反省会またお酒と狂いなしスケジュールで東京へ。

近年になくキビシイ山行でしたが、一週間もすると地図をひろげ来年は荒沢岳か、なんて考えています。オジイチヤン、懲りないネ。

出発する。

### 「三四郎会」酒と温泉、そしてちよつと山

原 博貞（昭41年卒）

「三四郎会」はトーチン会（蛭川代表）とクレージイ会（小島代表）の昭和39年、40年

卒の二代が主催する懇親会で、上は昭和38年卒の高橋さん、下は昭和43年卒の中村さんが参加しております。あくまで懇親を主とした会で昨年、湯河原で行われた初会には既に山登りを離れた方々も参加してなかなかの盛会でした。その際、蛭川さんに「次は那須をやるから、お前が幹事だ」と命じられ、有難いような有難くないような顔で「へへーッ」と承つたものです。

日程は5月13、14日とし、山組は両日を山にあて、13日は全員北温泉に宿泊し懇親を深める事にしました。原は地元民として車を提供しアッシャー君をつとめました。事前に蛭川さんに「コンセプトは山ですか？ 酒と温泉ですか？」と聞いたところ「酒と温泉だ」との確認を頂きました。北温泉は昭和42年のヒンズーケシユ遠征の出発前、英気を養うべしとの山本健一郎さんの発案で宿泊した谷間の鄙びたたずまいの温泉です。混浴で若い女性が多く、大いに銳気を高めたのを憶えています。

今回は少しメンバーが少なく昭和39年は蛭川さん、本間さん、昭和40年は小島さん、小野さん、坂井（旧姓山本）さん、佐藤力さん、昭和41年は佐藤久さん、原、昭和42年から齋藤さん、昭和43年は中村さんというメンバーになりました。

意欲的なのは本間さんで13日は峰の茶屋経由、朝日岳～清水平～三本槍岳に登り、帰路は中の大倉尾根から北温泉へ下るというものの。これには北海道からはるばる駆けつけた小野さんと佐藤久さんが参加、小島さん、坂井さん、佐藤力さんはロープウェイ利用で茶臼岳へ登り、峰の茶屋へ下つて朝日岳～清水平を経由して本間さん達と同じルートで北温泉へ直接来る事となりました。

さて当日は生憎の天気で曇り時々雨、9時に那須塩原駅に集合、原および家の二台の車でロープウェイ駅へ全員移動。本間さん達はためらう様子もなく霧雨の中、峰の茶屋に向いました。小島さん達もためらう理由もなくロープウェイに乗り込みました。原は車を置いてあるので本間パーティと朝日まで行き、帰りは小島パーティとの連絡係をつとめてから車で北温泉へ向うことにしました。ところが、駅で「皆さん、北温泉へ運んで欲しい物は車のトランクに入れてください」と言つたところ、トランクの中は酒だらけ。北温泉は駐車場が少し離れた所にあり、とても一人では持ち切れません。こんな酒をどうやって飲むのだろうという驚きもありましたがが誰が運ぶのかが当面の問題です。朝日岳で小島さん達をとめ、一緒に車で下つてもらうしかありません。

それにも本間さんの登山意欲はすごいものです。霧雨の中、強まる風をものともせず、どんどん登つて行きます。学生時代より意欲的です。学生時代は部室の主ともいえる存在でしたが（部室を下宿がわりにしていました）山では余り姿を見ませんでした。朝日で軽く昼食をとり、さあ、どうすると考える様子も見せず白髪をなびかせて歩く姿はまさしく山の仙人であります。

清水平への下りの手前まで一行を見送り朝日に戻つて震えながら小島さん達を待つ事三十分、霧の中に浮かぶスッキリした影は嬉や佐藤力さんです。力さんは名の如く力持ちで有名でしたが姿勢が素晴らしい遠くからでも識別できました。その姿勢のためか、その後山から茶道に転進し今ではその道のプロです。程なく小島、坂井の両氏も元気に到着されました。何とかここで引返すよう説得せんとしましたが、心配無用であつさりと「じゃあ引返そう」で終わりでした。という訳で酒たちも無事北温泉に各員のザックにもぐり移動する事ができました。

蛭川さん、中村さんもすぐに到着、となればすぐに酒盛りの開始です。温泉は無論です。ここは那須の元湯と異なりアルカリ性の湯で肌に柔らかくゆっくり入れます。少し遅くなりましたが本間パーティも到着、その頃は雨

も上がり、笛尾根に陽があたり美しい夕暮れになりました。

齋藤さんも到着。そもそも齋藤さんと今回不参加の佐藤之さんは学生時代は近い将来頭髪は退化するであろうと見られていきましたが、予想は大はずで二人とも昔のレベルをキープしており、笑っていた佐藤久さんと原が激しい浸食を受けたのは皮肉でした。

宴会については省略。皆、年の割には頑張つ

て飲みましたが全部の酒を空けるのは無理でした。就寝前温泉に、そこには飲みすぎたネーチャンが湯あたりか素裸でのびており、ここが相変わらずの混浴である事を確認できました。翌朝、現地解散。本間、佐藤久、中村の三氏はさらに意欲をみせ茶臼岳から白笹山に縦走し沼つ原へ、齋藤、原の二名は牛首のコルまでサポートし、原は車で沼つ原へ本間パーティを迎える。今回三四郎会は無事終了しました。

来年は本間幹事のもと、丹沢の温泉で決行される事となつておりますので、今回不参加の皆様には奮つて御参加ください。

その後ニセコまで戻つて羊蹄山に登るという計画。私にとつては、山登りだけでなく、フェリーでの船旅あり、北海道の大地でのドライブありで、大変魅力的なものでした。但し、車の定員の関係で参加者数に限りがあるとのことでしたが、幸いにも参加を認めていただき、7月初旬のベストシーズンに北海道の山と花と海の幸を堪能する旅を経験することができました。

今回の参加者は次の7名でしたが、日頃の心掛けの良い人ばかりだったので、北海道滞在中は、最初の半日を除いて雨に降られることが、昨年8月、針葉樹会有志によるニペソツ山行に思い切つて参加したところ、11時間超という長丁場にもかかわらず、何とか最後まで歩き通せた。そしてこの山行で少し自信を取り戻すとともに、何よりも北海道の山(というより北海道)に魅せられました。

また北海道の山に行く計画は無いかと密かに思つていたところ、昨年11月、アダージオでの針葉樹会懇親山行の際、蛭川さんが来年、利尻岳に行く計画があるということを知りそ

の場で同行をお願いしました。

#### 7月4日 曇り後雨 “いざ出発”

奥様と北海道を旅行した後、礼文島で合流する予定の小島さんを除いた6名が23時50分にJR八王子駅北口前広場に集合し蛭川車で出発、日の出インターから外環道に乗り鶴ヶ島で関越道に入りひたすら新潟港を目指して進む。途中の赤城パークリングエリアで小休止し運転を蛭川さんと交代したが、真夜中のドライブなので、眠気を抑えるのに苦労した。

蛭川さんの計画は、蛭川さんの8人乗りの車で新潟港経由フェリーで小樽に渡り、稚内までドライブし、再びフェリーで礼文島、利尻島に渡つて礼文岳、利尻岳に登り、さらに

## 北海道・花と山の旅

礼文岳、利尻岳、羊蹄山

佐藤 久尚（昭41年卒）

なお、今回の計画では、八王子～新潟（307km）、小樽～稚内（380km）、稚内～ニセコ（477km）、ニセコ～小樽（86km）、新潟～八王子（307km）、総距離1557km

を車で移動することになるため、事前にドライバーとナビゲーターの役割分担と交代の順番を決め、全行程それに従つて運転免許所有者5人が交代で運転することにした。

### 7月5日 雨後曇り “フェリーの旅”

5時少し過ぎに新潟港のフェリー乗り場に到着、フェリーの乗船時刻までには3時間以上も時間があつたが、明日の行程を考えると少しでも早くフェリーから降りる必要がある。そのため、早くフェリーに乗れば早く降りられるだろうと思つてフェリー乗り場駐車場の先頭に車を止めて乗船を待つ（後刻判明したことだが、フェリーは先頭に並べば必ずしも一番に乗れて早く降りられるというものではなく、乗船下船の順番はトラックと身体障害者や子供連れの人の車が優先）。

9時30分に乗船、10時30分に出航、フェリーは18300トンでトラック146台、乗用車58台を積める想像していた以上に大きい。中にはレストラン、カフェテリア、ゲーム室、映画館、大きな風呂場まである。ハイシーズンで北海道に行く人が多いせいか、ほ

ぼ満車状態であつた。

小樽港までの所要時間は約16時間、フェリーの中ではさぞかし退屈で時間をもてあますのではと思つて、小説を二冊持参したが、6人もいると話題に事欠かず、話と酒に花が咲き、昼食時に昼酒、夕食後も寝酒と飲みながら話しながらしているうちにいつしか時間も過ぎてしまつた。

### 7月6日 小雨後晴れ “礼文岳登頂”

小樽港に4時30分定刻に到着。昨日、乗船時にしつこく係員に頼み込んで、一刻も早く下船できるような位置に駐車させてもらったお陰で、5、6番目にフェリーから降りることができた。今日は稚内発10時50分の礼文行きの船に乗らなければならぬため、小樽から稚内までの380kmを遅くとも6時間以内で走り抜ける必要がある。しかしながら蛭川さんが事前に“北の道ナビ”で調べたところによると、法定速度で走ると5時間43分かかるとのこと。途中事故渋滞等、何があるか分からぬ。そのため飛ばせるところはスピード違反覚悟で飛ばすしかない。

パトカー、ネズミ捕りを気にしながら札樽道、道央道、留萌道、R233、R40号線を飛ばして何とかフェリーに間に合う時間に稚内に到着した（北海道では、本州からの車

がよく交通取締りのカモになるということで、事前に蛭川さんが小野さんの友人からネズミ捕り対策のレーダー探知機というすぐれ物を借りて車に設置しておいた。お陰でドライバーはある程度安心して飛ばすことができた）。

フェリー乗り場近くの無料駐車場に車を止め、フェリーに乗り込む。朝のうち雨模様の天気もすっかり回復して海も穏やか。利尻島やノシヤップ岬などの景観を楽しんでいるうちに、フェリーは礼文島香深港に到着（12時45分）。そこで、一足先に礼文入りしていった小島さんと合流した。港には本日泊まる宿の車が迎えに来てくれていて、その車ですぐに礼文岳登山道入り口まで送つてもらう。

礼文岳登山道入り口は内路という小さな集落にあり、海に面した車道の脇から登り出す。登山道はほんの最初だけ急な登りであったが、すぐに緩い笹原の中の道となる。そしてトドマツとダケカンバの樹林帯からハイマツ帯に入り、約2時間で頂上（490m）に着いた。礼文岳の山頂は露岩とハイマツのすつきりとしたピークで、そこにはまさに息を呑むような360度の大パノラマが広がつていた。南北に長く伸びる礼文島の全景から海に浮かぶように見える利尻島の絶景を堪能したあと下山にかかる。帰路は往路を戻り、登山

口まで迎えに来てもらった宿の車に乗つて心地よい疲労と喉の渴きを覚えながら宿に入つた。

この日の宿は「香栄丸」という漁師直営の民宿で、夕食には馬糞ウニと紫ウニの二種類のウニのほかにホタテ、タコ、カニ、さらにはソイや八角というめずらしい魚の刺身などが供され、全員、海の幸に舌鼓を打つた。

### 7月7日 晴れ “礼文の花を極める”

午前中、一足先に礼文入りして島の探索を終えた小島さんのお勧めに従つて礼文島の花のゴールデンコースと言われる桃岩展望コースからレブンウスユキソウの群生が見られるという礼文林道を散策することになった。

朝7時に宿を出発、民宿の車で島の南端の知床まで送つてもらう。そこから歩き出して海拔1500~2500mのなだらかな丘に広がるお花畠の中の遊歩道を元地灯台から桃岩まで行き、さらに礼文林道に入り香深まで約5時間半かけて散策、礼文島の花を堪能した。

レブンシオガマ、エゾカンゾウ、チシマフウロ、イブキトラノオ、ハクサンイチゲ、レブンウスユキソウ等々、この間、一体何種類の花を見ただろう。佐薙・丸山さんのご両人は、花に出会うたびに花の図鑑を取り出し花の名前を調べカメラにおさめておられたが、中に

はその場で名前が特定できないものも少なからずあつたようであつた。

13時少し過ぎに一旦民宿に戻り小休止した後、14時20分のフェリーで利尻島の沓形港に向かう。沓形では蛭川さんが以前に泊つて料理が良かつたという「正部川旅館」に泊まる。その晩もウニ、ホタテ、カニ等海の幸を満喫。

### 7月8日 曇り後晴れ “利尻岳登頂”

3時45分起床、昨晩用意しておいてもらつたおにぎりで朝食を済ませ、5時に旅館を出発。宿の車で沓形コース登山口の5合目見返台園地まで送つてもらう。ここには駐車場のほかにトイレ、電話、自動販売機がある。5時13分、さわやかな早朝の冷気の中を本間さんのがトップで歩き出す。

6合目までは針葉樹林帯の中の比較的緩やかな道が続いていたが、6合目を過ぎたころから傾斜がきつくなる。植生も針葉樹からダケカンバとなり7合目の礼文岩を過ぎるあたりからハイマツも現れ、傾斜もさらにきつくなる。8時50分、三眺山に到着。ほぼコースタイムどおり。ここから一旦少し下り、背負子投げの難所と呼ばれる急登を快調に登つて“親知らず子知らず”というルート中の最難所に入る。ここはかつて落石による事

故も頻発したという急なガレ場のトラバースであるが、慎重に抜けて10時20分、鷲泊コースとの合流点に出た。ここは9合目半、あと1ピッチで頂上ということでおつとする。そこから深く抉れた廊下状の急なガレ場を抜け所々ロープの設置してある岩の斜面を登り10時45分、頂上(1719m)に立つた。

利尻岳の山頂は南北の双耳峰からなり高度的には南峰(1721m)の方が少し高いが、崩壊が激しく危険ということで立ち入り禁止、北峰に小さな社があり、そこが頂上となつていた。山頂は賑やかで、社の周りには大勢の登山者が群がるように休んでいたが、我々は南峰側に少し下つた所に場所を確保して昼食をとる。天気は快晴で頂上から360度の眺望が楽しめるはずであったが、生憎7合目あたりから下は雲に覆われていて礼文島はおろか麓の町並みも見えず。11時25分に山頂を後にして鷲泊コースを下る。途中から雲の下に出て眺望がきくようになった。

礼文島や麓の景観を楽しみながら下ること約4時間で、名水100選に選ばれた甘露泉に到着、そこから舗装の道を歩くこと10分、15時35分に鷲泊コースの登山口である北麓野営場に到着し長かった登山を終えた。その晩は、鷲泊の小野さん紹介の「ホテルあや瀬」に泊まつたが、ここでも海の幸満載の料理が

食べきれないほど出て来て、なかには残す人もいた。

なお、利尻岳でもウコンウツギ、エゾツツジ、オニシモツケ、ハクサンイチゲなどの色とりどりの花が各所で見られ我々の心を癒してくれたが、佐薙さんと丸山さんは急登の中でも花が現れる都度カメラに収めるのに余念がなかつた。そして夕食の後、佐薙さんが事前に準備した「北海道で期待される山の花（170種）」のリストと、丸山さんが撮った写真（デジカメのメモリーを小島さん持参のノートパソコンに入れて画像を拡大したもの）を比較しながら花の名前を特定して改めて礼文、利尻で見た花を振り返つた。

#### 7月9日 晴れ “北の大地のドライブ”

朝食後、宿の車で鶴泊港まで送つてもらい、8時40分のフェリーで稚内に戻る。10時20分稚内港着、ここで丸山さん（急用が出来て帰ることになった）と小島さんと別れて佐薙、蛭川夫妻、本間、佐藤の5人は蛭川車でニセコに向う。

ルートは往路と異なる名寄バイパスから道央道に入札幌、定山渓温泉、中山峠経由ニセコまでの477km。北海道の雄大な景色を楽しみながらのドライブで6時少し過ぎに、その日の宿「シェーンベルク」に到着した。

ここは以前、蛭川夫妻が泊まつて良かつたという手作りのソーセージで有名な民宿で、手作りソーセージと搾りたての牛乳、新鮮なトウモロコシが美味しかつた。夕食後、宿の主人に送つてもらつてニセコの温泉で汗を流す。当初の予定では佐薙、本間、佐藤の3人は羊蹄山に登る計画であつたが、利尻岳登頂の疲れが残つていたため羊蹄山登山を翌日に回して、この日は黒松内町にある我が国北限のブナ林「歌才ブナ林」の探訪に予定を変更した。車で約1時間、最初にブナ林近くのブナセンターに行つたが、この日は生憎休館日。それでも管理人が特別に扉を開けてくれて内部を見学することができた。ここでブナの生態や黒松内町の地理や歴史についての知識を得た後、ブナ林の探索に向かい、ブナの巨木の茂る気持ちの良い林の中を、佐薙さんの解説を聞きながら約2時間散策を楽しんだ。ここでは、ブナのほかにシラカバ、エゾマツ、トドマツ、ハンノキ、オオカメノキなどが見られ、佐薙さんの樹木の蘊蓄の深さに感心させられた。

午後、俱知安のスーパーに寄つて明日の朝食、昼食の買い物をして宿へ。この日は、小野さんの別荘のある別荘地内のゲストハウスに泊めていただく。夕方、小野さんの奥様が我々のためにわざわざ札幌から出て来てくださり、小野さんからの差し入れのビールと日本酒を、また小野さんの山の友人で蛭川、本間さんとも面識のある藤田さんからの差し入れの新鮮なキュウリとハスカップを沢山持ってきていただいた。（小野さん、奥様、藤田さん、ありがとうございました）。

#### 7月10日 晴れ時々曇り

##### “北限のブナ林探索”

朝4時起床、昨日買つておいたおにぎりを食べてゲストハウスを出発、佐薙、本間、佐藤の3名は蛭川さんに車で送つてもらって羊蹄山真狩コースの登山口へ向かう。5時登山口着、早速歩き出す。最初はエゾマツ、トドマツの樹林帶の中の緩い登り。そのうちだんだん傾斜もきつくなりジグザグの道を登ると6合目に到着。そこからさらに急な登りとガレ場のトラバースを経て9時15分、火口壁のコルに到着、羊蹄山の火口は富士山ほどではないが、それでもかなり大きな火口で噴火の規模が偲ばれる。

午後、俱知安のスーパーに寄つて明日の朝食、昼食の買い物をして宿へ。この日は、小

コルから時計と反対回りに頂上を目指す。この頃から風が強くなり強風の中を大きな岩が積み重なつてできた岩峰を越えたり巻いたりしながら進むこと約40分、10時5分、やつと頂上(1893m)に出た。

山頂は強風が吹き荒れるガスの中で残念ながら眺望はゼロ。岩陰で風を避けつつ昼食をとり10時30分下山にかかる。山頂からは火口をさらに半周回るような形で俱知安コースに出る。最初のうちは次々に現れる花を楽しみながら下つたが、それも厭るとあとは佐薙さんの高度計による「〇〇メーター下つたよオー」という報告を聞くのを楽しみにしながらひたすら下る。

14時33分、半月湖<sup>はんげつこ</sup>登山口に到着し登山を終了したが、羊蹄山も高山植物の宝庫で、上り下りの各所でイワギキョウ、チシマギキョウ、シラネアオイ、ゴゼンタチバナ、ウコン、ウツギ、エゾカンゾウ等々の花が見られた。なかでも山頂付近に群生して咲いていたウラジロナナカマドの花が印象的であった。

6合目から蛭川さんに電話で到着時間を連絡していたため、登山口の駐車場には蛭川さんが車で迎えてくれていて、そのまま乗り込みニセコ昆布温泉「鯉川温泉旅館」へ。ここは日本秘湯を守る会会員の宿というだけあって鄙びた一軒宿。昔ながらの風呂場の雰

囲気と黄色く濁つた湯が素晴らしい。

この後、7月12日の朝8時に昆布温泉を立つて小樽へ。小樽港で小野さんと小野さんの岳友の古田さん(蛭川、本間さんとは一緒に山に登つたこともある旧知の仲で、一升瓶の差し入れまでいた)の見送りを受けた後、フェリーで新潟港に出て関越道を通つて7月13日の11時少し過ぎに八王子駅に到着して北海道の旅を終わつた。

思えば9泊10日の長い旅であったが、同行者にも恵まれ、「あつ」という間に過ぎてしまつた感の楽しい旅であった。そのうえ、今回のは百名山のうちの二つに登れ、いろいろな花や木についても知識を得ることができた。私もひとつ本当に収穫の多い旅でもあつた。これもひとえに蛭川さんの綿密な計画と旅行中時々に示されたきめ細かな配慮、ならびに、佐薙さんの親切なレクチャーのお陰であり、改めてお礼申し上げます。

3年前、当時から変わらず付き合つてくれる近藤とふと思い立ち、梅雨の晴れ間の前穂高岳北尾根を辿つた。薄れた記憶のせいで松高ルンゼの入り口に気付かず、奥又白谷を詰めて直接北尾根に取り付くという失敗もしたが、この山行で今までの山歩きとは違う、年を重ねて知る感動があることを知つた。しまい込んで忘れていた昔の宝ものを見つけて磨き、いとおしむ……穗高は往時にもまして美しく見えた。過去を素直に懐かしんでもいいのではと初めて思った。

さて、昭和51~54年卒を中心とする会員有志数名は、この十年ほど夏は沢登り(沢の途中で1~2泊する長いもの)を恒例としていた。しかし、昨年南ア易老沢<sup>いろづ</sup>で限界を痛感

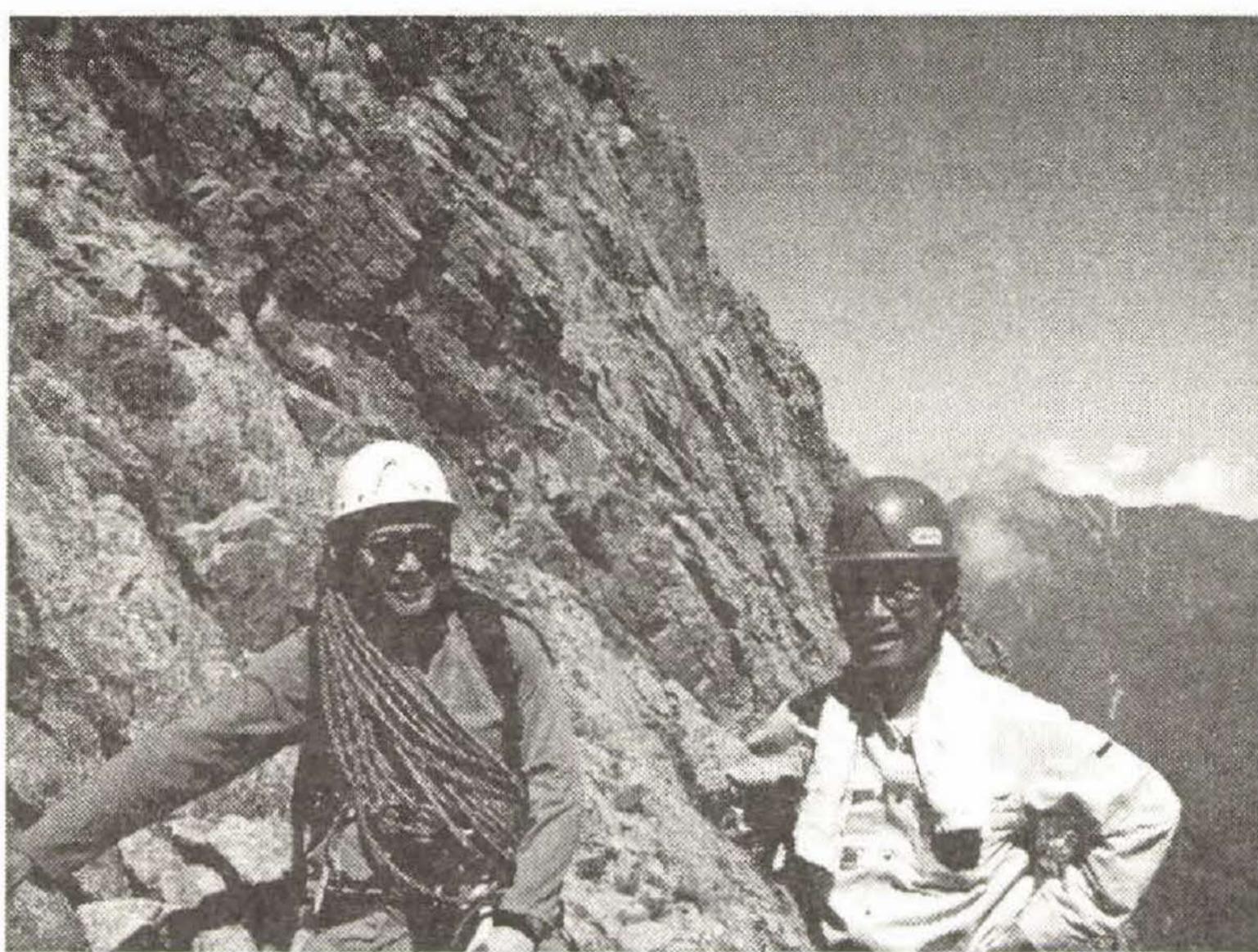
## 剣岳八峰——夏合宿の跡を辿つて

佐藤 活朗(昭53年卒)

した(ガイドブックの2倍の時間がかかった)

こともあり、今年は勝手知つたる剣岳に行くことに決した。山本、倉知、竹中先輩が会報108号に書いていた長次郎谷他の記録の影響もあつたかもしれない。学生当時の合宿を追体験したくてテント生活とした。

合宿といえば、30年以上前まではOB合宿というのがあつたそうだ。真砂沢には小屋もあるし、今回も賑やかになると楽しいと思つて会員にメールで勧誘してみたが、残念ながら参加希望者はなく、結局昨夏と同じ前神、



八峰を登りきり、主稜線上にて一休み。佐藤(左)と前神

近藤、佐藤の3人となつた。

3人の年齢は52～55歳。50代前半というのは微妙な年齢だ(そもそも人生で微妙でない年齢なぞ無いのかかもしれないが)。家族や仕事の環境が変わり、社会的存在として移り行く、体力もじわじわと落ちてくる。一方で針葉樹会の元気いっぱいの諸先輩を見ていると励まされ、まだやれるかもとも思う。せつせと体を鍛えている近藤は別として、あの二人はこの暑さの中で歩けるのか。そんな交錯した心境で懐かしい剣に向かつた。

### 23日(木)夜来の雨があがり、夏らしい快晴。

仮泊した扇沢ターミナルから始発バスで黒四ダムに入り、旧日電歩道を黒部川の下流に向かつて歩き出す(8時)。危険部分にはワイヤや鎖などがきちんと取り付けられているが、藪が茂り、道はやや荒れ氣味。利用度の少なくなつた登山道の維持は大変だろうな。あと10年くらい経つたら、百名山の最短ルート以外のアルプスは太古の自然に戻るのかもしれない。

4時間かけて内蔵助平に着く。気持の良い清流の傍で休憩して出発しようとしたら、突然前神氏の足が激しく攣る。辛そうだ。しかしここまで来たら真砂沢に向かうしかないの

で、荷物を再配分し休み休みハシゴ段乗り越に

着く。ハシゴ段乗り越から真砂沢に下りる路は、散歩するような調子で通過した記憶しかないが、実際は名前どおり断崖の強烈な急下降。記憶／現実のギャップは若さと体力を失つた証……こういうギャップを繰り返し経験させられるのが、再訪型登山の辛いところだ。

予想よりかなり遅れて16時30分、真砂沢ヒュッテに着く。往時はテント100張り?くらいが軒を連ねていたが、今日は僅か3張り、静かに小屋で買つたビールを飲む。

### 24日(金)晴れ

剣岳のクラシック中のクラシックルート、八峰上半から剣岳頂上をまわることにする。6時20分出発、合宿の朝の高揚した気分を思い出しながら、長次郎谷の雪渓を登る。後続の一組のほかは見渡す限り誰もいない。

9時、五峰が圧倒的に聳える五六のコルに着く。まだ疲労はなく爽やかな気分。六峰ヘ、ザイルを出してコルから50メートルほど登る。難しくはないが高度感はある。往時のような自信は無いので、足を滑らせたらアウトという場所ではできるだけアンザイレンする方針だ。

踏み跡を辿つて六峰の頂上に着く。六七のコルへ下る踏み跡が見当たらず、三の窓谷側を懸垂下降する。この日は合計三回の懸垂下

降をしたが、どこもしつかりした支点が作られていた。また思い出話になるが、当時八峰上半縦走でザイルをザックから出したことはなかつた。ここも確保無しでクライムダウンしたのか……元気だった、怖さを感じなかつた、親不孝だったとしみじみ思う。

その後も岩稜をのろのろ進む。8月だとうのに我々だけの静かな山、人影のないチンネや、本峰、源次郎尾根の雄大な景色もしつかり各人のデジカメに収める。

12時頃、八峰で2度目の懸垂下降の後、またザイルにつながつて三の窓側にトラバース。最後に容易なガラ場を200メートルほどで、主稜線の狭いギヤップに着く(13時)。これで八峰は無事通過、一息ついて頂上に向かって出発する。

ギヤップ下から20メートルほど懸垂下降で見覚えのある池の谷ガリリーに降り立つ。下方に小窓の王の岩峰が雲の中から姿をあらわす。登りついだ三の窓乗越から剣の頂上まではごく近いと記憶していたが、実際はいくつも小ピーグがあり、疲れも出てなかなか頂上に着かない。ルートは概ね長次郎谷側を通過する。ザイルを出すほどではないが、八峰に劣らず切れ落ちた部分もあり気が抜けない。15時過ぎに頂上に着く。一般ルートからの登山者は下降して誰もいない。真夏の日射し



剣岳山頂にて。前神と近藤

間、故細野伸二君の靈に合掌する。

週末が近づいたせいか、熊の岩にテントが一つ、右俣で二組の登山者と行き会う。

頂上から2時間かけて17時30分に真砂のテントに戻る。疲れたが確かな達成感があつた。

### 25日(土)～26日(日) 晴れ

八峰を済ませ疲れが残つたので、25日は自由課題とする。剣沢まで行き10時頃いつたん解散。近藤は冬合宿思い出の奥大日岳を、佐藤はなぜか登る機会がなかつた立山(大汝山)をそれぞれ往復、前神は雷鳥沢で直行。15時過ぎ、目的を達して雷鳥沢で3人再会。雄大な立山山群に囲まれた気持ちが良いキャンプ場で、あれこれ語りつつ楽しい夕を過ごす。

明けて26日、室堂ターミナルから立山黒部アルペンルート始発を乗り継ぎ、9時に出发点の扇沢に戻る。北アルプス帰路の定番である安曇野の温泉と旨い蕎麦を堪能して明るいうちに帰京した。

最近は、大きな故障もなく変わらぬ仲間と歩けることがとてもありがたいと思える。これからも体力の範囲内で無理をせず、積み重ねた思い出も生かして、仲間と楽しんで登りたいと思う。

左俣の中間部は雪渓が消えてゴルジュになつてるので、熊の岩を横断して右俣に移る。

夕日に輝く六峰のフェース群が美しい。もう登ることはなさそうだが、A、Cフェースは昔の宝なのだ。立ち止まり、1988年8月Dフェース基部で逝った一橋山岳部の仲

奥三河沢泳ぎパート2

奥三河／早木戸川  
「瀬戸の渓谷」ゴルジュ帯

山田 秀明（平15年卒）

9月7日（金）未明。台風上陸。飛行機欠航。出張中止。九州の沢も断念…。

そういうえば先週、鳥本（H17年卒）から「来週、あいてますか？」と誘われていたな。まあそのときは無下に断つたけど、まだあいているかな…というわけで前日ではあるが電話をすると、「土曜夜はエヴァンゲリヲンを見に行かなければいけないので、昼間だけなら…」との返事。まあ私も日曜日は草野球の試合だし、ちようどいいんじやないということで、前から私が目星をつけていた天竜川下部のゴルジュに行くことになった。

浜松から北へ向かうこと1時間ちょっとで天竜川の秘境っぽいところが始まる。それにしても、台風の影響か、やはり川が茶色いぜ。それに流れがブツトイぜ。それにしても道悪いぜ。ふつう「県道1号」となれば道はいい

だろう！ それなのに何だこのクネクネ感。

カーナビの画面には「サタデーナイトファイバー」のDVDが流れているが、粗筋もまったく分からぬぜ。そんなこんなで浜松を出ること3時間弱でようやく到着。東京からだと6時間もかかったことになる。

林道に車をとめ、支流から早木戸川へ下り、本流を溯ること10分弱。ゴルジュが始まる。ここでは身ごしらえ準備。ウェットスーツにライフジャケット（鳥本には2年前に私

りある。ここは慎重に、つまりはとりあえず先輩の特権で鳥本にロープを引っ張らせて泳がせる。まあ何もいよいよでよかった。そうなれば安心で私も後続できるというもんだ。次もさらにゴルジュが狭まり30mほどの瀧。ここも水が濁つており、こっちの方こそさらになんか出そうだ。躊躇なくここも鳥本をまず泳がせる。ここも何もいよいよだ。良かった、これで安心だ。

ここで沢は左へ曲がり1mの段差のあと、この沢の核心部5mチョックストーン（CS）滝。とはいえる、実は左岸から簡単に巻けるのだが、これを巻いてしまっては6時間かけてここまで来た甲斐すらない。ワイがつっこむ。まず淵を突つ張つて突つ張つて突つ張つて：足攣つた…。オウ。バシャーン。なんだ足つくじやん。うーん、でもどうやって登るんだろう。

左壁にリスが繋がっているので人工を試みるもあえなく2個目でカムがはずれ、意気消沈。やはり右壁か。ということできヤメ#1

が卒業記念品としてプレゼント)。

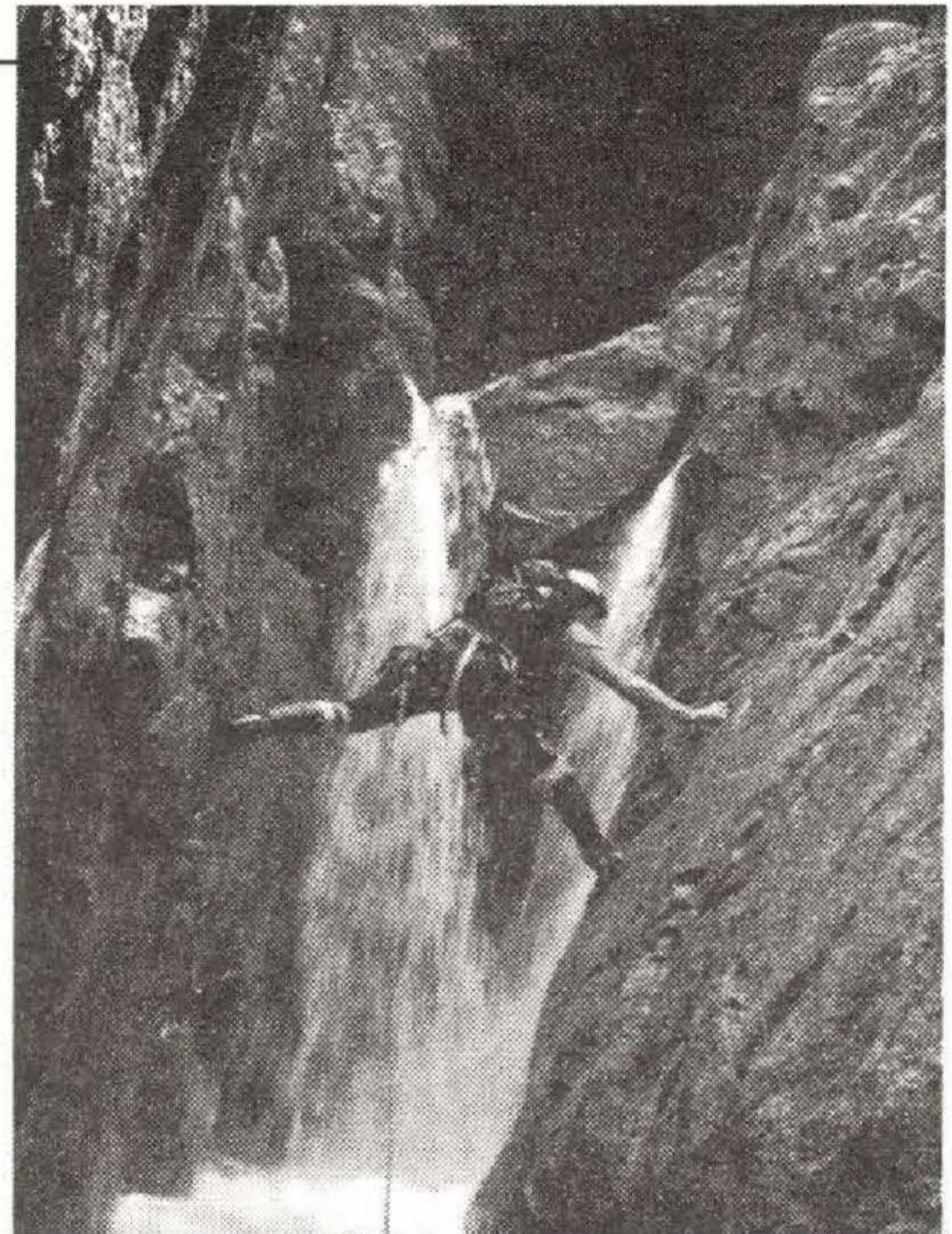
それにしても暑い。9月とは思えない陽気。

台風一過のおかげか。よつしやー泳ぐぞーと張り切るが、うん？ 水が濁つている。なんだか泳いだ途端にわけのわからない変な生き物とかがでてきて襲われそうな雰囲気がバツチ



早木戸川のゴルジュを泳ぐ鳥本

ジユは終わった。も、もう終わりですか……。  
み、短すぎるぞ。2時間も遡行してない  
じやん。



沢の核心部の滝を攀じる山田

を突っ込んでアブミにのり、あとはフリーで  
いけば、C.Sを乗り越せた（落ち口はちよつ  
と怖かっただが……）。

鳥本はといえば、回収に手間取り落ちてい  
る。挙句に「回収できませーん」とつれない  
返事とともに登ってくる。おい、俺のキヤメ  
ロット7500円、アブミ3000円、加え  
て俺の思い出1000円、それに消費税5%  
が……。まあ冷静に考えたら、どうせもうそろ  
そろ終わりだろうし、まあ同ルートを下れそ  
うだし。そのとき、回収すればいいか！ と  
いうわけで、何かの拍子で外れてしまったら  
イヤだな……と後ろ髪を惹かれる思いはあるけ  
れども前へ進む。

沢はさらによつとした淵で左へ曲がり2  
mナメ滝となつて、そしてなんとなくゴル

チヨイ休憩入れた後、今来たゴルジユを今  
度は下る。5m C.S滝は左岸を巻いて下ると、  
キヤメとアブミが滝に残っていた。涙がチヨ  
チヨきれるほどうれしいっす。無事に回収し  
たあとは30m滝を泳ぎ下り、3mナメ滝を  
下つてその淵を泳げば、もうスタート地点。  
なんだか拍子抜け。あとはできる限り泳いで、  
入渓点まで下り、車に戻つた。

そして上流200mにある「きよめの湯」  
に入つて身を清め、味噌カツをたべるとあと  
は帰るだけ。帰りは、行きの道の教訓を生か  
して立派な国道151号を選択。これが正解。  
車内ではこんどは長渕剛の「桜島」DVDが  
流れていたが、2人で「乾杯」を熱唱する余  
裕もあるほどだ。17時。まだまだエヴァ上映  
に間に合う時間にて、浜松で解散。

ちなみに、翌日の野球の試合はワイの3安  
打の活躍で見事に勝つたのだつた。

\*は他の三月会参加者と山行実績が重なつてい  
ることを示す。

同行者の敬称略、会員以外の同行者の名前は  
省略。

## ■5月21日■

【出席者】 石井左右平、山崎擴、佐薙恭、有賀盈、  
中川滋夫、三井博、倉知敬、高橋信成、蛭川隆夫、  
本間浩、小島和人、小野肇、竹中彰（記録）

### ●話題

1 丹沢にヒルが増えている。出席者の中から「3  
年前の7、8月の大山で雨が降るように落ちてき  
た」とのこと。吸いつかれた場合の対策は塩また  
はタバコをやると直ぐ落ちる。丹沢に出るのは山  
ヒルで川ヒルではない。なお、丹沢ではゴールデ  
ンウイークの蛭が岳山荘で140人泊まったと  
のこと。

2 連休明けに第2回三四郎会（40年卒前後の会  
員の「山と温泉の会」）が原さんの幹事で那須で  
開催され、蛭川、本間、小島、小野さんなども参  
加した。この会に三井さんが入会を希望した。な

# 二月会通信

お、来年は本間さん幹事で4月13～14日に丹沢周辺で企画の予定。

7 本間さんから倉知さんに丹沢では山神峠は如何でしようかとお誘いがあった。

5月15～19日 大台ヶ原、大峰山、高野山\* 小野ほかと。高野山は素晴らしい。

竹中 4月17～18日 貫ヶ岳、高ドツキヨウ\* 蝙川、小野ほかと。蛭川さんのドツキヨウシリーズに付き合つて山梨南部の山へ。塩之沢温泉ではタケノコを満喫。

3 石井さんから昭和36年に交通事故死された中村謹治（昭和23年卒）さんの「私記」が出てきたとのことで回覧された。ルーズリーフ式のノートに縦書きで細かな字でビツシリ書かれている。

内容の一部に以下のようない記述があり。「山で結ばれた友、どうして斯んなに嬉しい、頼もしい人達なんだろう。お互に唯、山へ行くというだけで知り合つたんだのに」。中村さんは佐薙さんの中学、高校の先輩でもあるとのこと。

4 中川さんが北岳バットレス第四尾根登攀メンバーを募集中。出席者の中からは、興味あり（佐薙）、登つても良い（倉知）、日程が合えば行きた（竹中）。関心のある向きは中川さんと連絡を取りつて頂きたい。

5 佐薙さんから「ぐるり丹沢」について、自分は完歩したが、「追試」の必要なメンバーが出たので、それにつき合いますとのこと。

6 倉知さんの直近（2003年）の翻訳書C・カラランによるボニントンの評伝『冒険の達人』に関連して、倉知さんから「買った人も余り内容を読んでいないのでは翻訳の張り合いもない」との辛口のコメントや、「登れるのは70歳までと考えると来年一杯ぐらいが限界かもしれない」との発言あり。もちろん肉体的にはまだまだ山は登れるのでしようが、倉知流の意味のある登山を考えた場合の話のようです。

●山行実績  
佐薙 4月26～28日 ぐるり丹沢\*

5月 箱根・三国山 ぐるり丹沢が終つたので、ぐるり箱根をスタート。

中川 4月23日 丹沢（小丸尾根・バカ尾根）丹沢山開きの翌日。登りは誰にも会わず。

有賀 5月4～5日 金時山 ヤロ一會の箱根旅行の一部として。

三井 4月21日 立岩～荒船山～内山峠（10時30分～16時20分）岩場数ヶ所あるも簡単。

5月3～4日 ぐるり早戸川 西野～蛭ヶ岳（泊）～丹沢山～三峰～宮ヶ瀬。

高橋 5月3日 景信山～高尾山 日影からぐるりと回つて、また日影に戻る。

5月18日 日影から高尾山麓。バードウォッチング。キビタキの声を採集。

蛭川 4月17～18日 贫ヶ岳 17日に貧ヶ岳に登つた後、登山靴を紛失し、念願の高ドツキヨウを断念。

4月26～28日 ぐるり丹沢\*

5月5日 ササデツキヨウ、デツキヨウ山 この珍しい山の在処が終に判明。

本間 4月26～28日 ぐるり丹沢\*

5月11日 三ツ峠 裏口登山道～府戸尾根～。

5月13日 那須、朝日岳、三本槍 三四郎会山行 小野、佐藤久と。

5月14日 白ヶ岳、南目山 佐藤久、中村と。北温泉泊。

小島 5月13日 茶臼山、朝日岳 三四郎会に参加。

小野 4月17～18日 貫ヶ岳、高ドツキヨウ\*

5月13日 朝日岳、三本槍\*

5月15～19日 大台ヶ原、大峰山、高野山\*

(追記) 蝙川、竹中 6月16～20日 北海道の小野さんのガイドで、天候に恵まれ道南の山々(大三軒岳、写万部岳、狩場山、昆布岳)と温泉を満喫。

## ■6月18日■

「出席者」 山崎擴、三井博、高橋信成、小島和人、本間浩(記録)

●山行実績  
高橋 2007年度に2007mの小遠見山へ。神社と哲学の高橋さんらしからぬダジャレ。本命は白馬美術館のシャガールでした。

本間 丹沢蛭ヶ岳の熊木沢直登ルートは、落石、ガレで登山を中止したと申し上げたところ、山崎さんは数年前高橋さんと登った時は取り付き部分で迷つたが、その先は順調であったとのこと。滝谷ではないが、山の崩壊が進んでいるのでしょうか。

## ■7月17日■

「出席者」 山崎擴、佐薙恭、中川滋夫、山本尚禎、三井博、遠藤晶士、蛭川隆夫、小島和人、本間浩、川名真理、竹中彰(記録)

●話題  
高橋 2007年度に2007mの小遠見山へ。神社と哲学の高橋さんらしからぬダジャレ。本命は白馬美術館のシャガールでした。

本間 丹沢蛭ヶ岳の熊木沢直登ルートは、落石、ガ

レで登山を中止したと申し上げたところ、山崎さんは数年前高橋さんと登った時は取り付き部分で迷つたが、その先は順調であったとのこと。滝谷ではないが、山の崩壊が進んでいるのでしょうか。

1 出席者のうち4名が参加した利尻山遠征に関連した花や樹に関することで始まりましたが、佐薙さんが今回初めてシラネアオイを観察されたと言うのは一寸驚きました。その佐薙さんから昨年ニペソツへ行った時にシナノキを見過ぎたが、今回確認したとの報告がありました。

2 最近積極的に山行を重ねている小島さんからは、11月のヒマラヤトレッキングに備えてハイシーズを外して富士山に行きたいとの発言があり、遺族の意向で松尾さん、T中さんが主要掛け人となつてアンデス関係者に加えて、岡垣さん、市畠さん、柴崎さんが参加したが、紫峰山岳会(立川高校山岳部OB)メンバーが大勢出席し

あり、佐薙さんもこれに反応して車を極力利用し、小屋の営業期間中にどのルートが良いかとのユーションロッヂ 管理人不在で休業。ただし、緊急用の避難室(3、4人、布団あり)、炊事場(水道、電燈あり)は開放(入口建物右側面)投げ掛けがありました。

3 来年に蛭川さん以下が計画しているキリマンジャロ登山に関連して、佐薙さんからマツキンリー登山を計画した際のガイドによる荷物チェック等の体験披露がありました。

4 佐薙さんは、「ぐるり丹沢」完了後、今は「ぐるり箱根」を始めて、三国山から湖尻峠をトレイルし、次は湖尻峠から金時山へ向かうとのことです。

5 懇親山行に關し山崎さん、三井さんから11月の矢倉岳を希望するとの発言がありました。また、中川さんから懇親山行は年に4回ぐらい企画してはどうかとの声も。佐薙さんから、山行幹事をやっても良い、シニアOBがもっと前に出てやるべきだ、針葉樹会も三月会以外に三四郎会など色々の集まりがあつても良いのではとのご意見も出ました。

6 三月会はメンバー固定化の嫌いがあるが、もつと40、41年卒の会員参加を働きかける必要ありとの発言もありました。該当年度の皆さん、積極的に参加を。

7 中川さんから甘利さんの13回忌の報告があり、遺族の意向で松尾さん、T中さんが主要掛け人となつてアンデス関係者に加えて、岡垣さん、市畠さん、柴崎さんが参加したが、紫峰山岳会(立川高校山岳部OB)メンバーが大勢出席し

丹沢情報・玄倉林道の青崩トンネル、通行禁止。河

たとのこと。暫く甘利さんのエピソード（ザイル

ワークは卓越、岩登りの際に恐怖心がない、中3時に体操をやつたことでジッヘルが凄い：）が披露されたが、佐薙さんからは4年（S31年1月）

の時に甘利さんが四峰正面に向かつたが連絡がないので、吉田チーフリーダーの指示でT中さん

と二人で上高地に入ろうと釜トンネルの中で甘利さんとすれ違った際、先方から「お宅たちは何処行くの？」と声を掛けられた：との懐旧談。佐

薙さん高校生の頃は独学で学んだとのことで、一橋入学時に街の山岳会（徒步溪流会、昭和山岳会等）入会の選択肢もあつたが、部室に来てがつかり、上級生もいなかつた、T中もテントの中で何時も文句を言つていた：との発言も。

### ●山行実績

佐薙 7月6～11日 礼文、利尻、羊蹄山\* 蝶川さんの周到な準備計画で快適な山旅でした。

蛭川 6月30日～7月1日 白砂山 日立山岳部OB会。期待の山だつたが雨で展望ゼロ。

7月4～13日 礼文岳、利尻山、その他\* マイカーで新潟からフェリー。車の事故、トラブルなくホツとした。宿で小島さんのPCで、撮つたばかりの花の写真を見る。初めての経験。

竹中 7月5日 箱根・金時山 家内と、公時神社から自衛隊80人と前後して登る。

7月7日 丹沢・飯山観音～巡礼峠～七沢 如水会町田支部ある～う会行事。ヒルの猛攻あり。3、

4箇所吸われる。

小島 7月6日 礼文岳\* 夢のような美しい島。

7月8日 利尻山\* 楽しい10時間の山行。

本間 7月6日 礼文岳\* 利尻に備えての好いトレーニング。

7月8日 利尻山 梅形コースは結構キツイ。最後の登りはザレで苦労。

7月11日 羊蹄山\* 利尻と違い登りは穏やかだが、頂上は風が凄かつた。

川名 5月20日 毛無山 古瀬さんの車の練習の付き添い？を兼ねて。西側からとりつくと、峰からいきなり富士山と裾野の広い視界が開ける。そのドンデン返しが面白い。信玄の鉢山の一つで遺跡としても楽しめた。

### ■8月20日■

### ■9月18日■

【出席者】 山崎擴、石原脩、佐薙恭、上原利夫、中川滋夫、三井博、高橋信成、蛭川隆夫、本間浩、西牟田伸一、金子晴彦、竹中彰（記録）

今月の出席者には石原さんが団碁の会決勝戦の後（残念ながら3位だったこと）で冒頭に顔を出されたほか、初参加の金子さんが北京在勤時に同地の山仲間とまとめた長城ガイドブックの披露（詳細下記）に対して数名の購入希望者がありました。なお、常連の石井さん、小島さんはお休みでした。

### ●山行実績

石井 7月25日～8月2日 Mount Rainier 約2

### ●話題

1 秋の懇親山行は11／17（土）に矢倉岳にて行なう。詳細は後日山行幹事から案内する。

2 明日から佐薙・遠藤・西牟田さんが富士山へ出かける。関連して、佐薙さんはルートを変えて毎

（泊）

高橋 8月11～13日 千本檜小屋（泊）～八海山～中ノ岳（泊）～丹後山～十字峠。\*竹中、本間、西牟田、川名と。2日目は千本檜小屋発5時、中ノ岳避難小屋には5人ばらばらに17時15分～18時12分着。暑さと重荷でかなり苦戦。

三井 8月14～15日 北アルプス笠ヶ岳 笠新生道を往復。登り8時間、下り6時間。

年富士登山を考えたいとのことでした。また、佐薙さんは以前に春日井さんと行つて敗退した荒沢岳への再挑戦のお考えもあるとのことでした。

同行)、神之川ヒュッテが台風9号で潰されたと佐薙さんから報告がありました。

### 3 蝶川さんなどの来年のキリマンジャロ計画は

これから本格的な準備段階に入るが、関連して、ヘミングウェイの小説、エバ・ガードナーの映画

「The Snows of Kilimanjaro」が話題となりました。

4 この夏の飯豊で中川さんが稜線で犬に追われて転倒、怪我をされた顛末の報告があり、野犬かどうか気になっていた件は、登山者が連れて歩いていた飼い犬が後ろに来たのに気を取られて少しスリップされたことが判明しました。

5 上原さんからは法科大学院に関連して将来的な弁護士数の問題等のお話がありました。

6 金子さんは、10／20～11／11にヒマラヤのラプチエに実兄の仲間と出掛ける予定だが、パミッショ�이が出ないのでトレッキングに切替えることのこと。なお、Royal Nepal航空は現在運休中のこと。(山本尚禎さん撮影のラプチエの写真の披露がありました。)

7 また、金子さんは北京在勤中に週末毎に現地の仲間と長城40km(燕京トトレール)を歩いて地図を作り、自費出版本「燕京の旅」にまとめ、希望者には千円で分けているとのこと。この件については、来年の針葉樹会新年総会でレクチャーしてもらいう予定です。

8 最近の丹沢の情報として、昨年3月に山本健一郎さん最後の山として出掛けた(佐薙・本間さん

## ●山行実績

山崎 9月2日 大山。雨のためミノゲ越で下社へ。

佐薙 8月27～28日 徳本峠～霞沢岳。単独で。天気予報により中央ア綫走をやめ、行先変更。しかし、徳本から雨と雷、途中で引き返す。徳本小屋の宿泊客一人のみ。

上原 7月18日 陣場高原下～陣場山。こんな良いコースがあるとは。景信山～?沢

中川 7月25～28日 飯豊山。表登山口(川入口)

より往復。途中犬に出会い転倒、オデコをぶつけ出血。フェーン現象で暑い登山だった。

三井 9月8～10日 中央ア(木曽駒～空木岳)。

宝剣岳南稜の岩場が面白かつた。空木岳の登りも。

高橋 9月13日 八方尾根は雨で中止  
蝶川 7月23日 大藏経寺山

8月18～22日 飯豊山縦走。下記の竹中と同じ。

9月14～16日 カムイエクウチカウシ山。渓流シユーズを買っての日高の沢登りであつた(通称カムエク)が、大雨の増水で八の沢三股あたりで敗退(同行 小野)。しかし、沢登りの魅力にはまりそう。

竹中 8月11～13日 八海山～中ノ岳～丹後山。前月の三月会で高橋さんが報告の通り(同行・高

橋・本間・西牟田・川名)。暑さで参りました。  
8月18～22日 飯豊山縦走。小野さんの深田百名山・百登目の慶祝登山(梶川尾根～川入登山口)に参加。(同行 蝶川・小野・松野夫妻・加藤・高橋)。全体に曇り～雨模様の中、山中2泊の行程。

金子 9月2日 鳥海山。ウォーキングのあと日帰り。

佐薙 9月 富士山。同行II遠藤、西牟田

上原 9月 仙水小屋から甲斐駒。高校山岳部OB会。仙水小屋は泊りたかった小屋。

三井 10月 朝日連峰大朝日岳。古寺温泉からの往復。藏王。

高橋 10月 八方尾根。植物を見に。

蝶川 10月 七つ岩山、小野岳。小野さん同名の山。小野・三森さんと。

10月 秋田駒ヶ岳、森吉山。高校同期追悼登山。竹中 9月 尾瀬ヶ原～尾瀬沼～鳩待峠～沼山峠。如水会町田支部歩こう会行事参加。

本間 10月 箱根・駒ヶ岳。下見。

西牟田 9月 那須三山。JAC同期会(麗山会)。同行 金子。

金子 10～11月 ラプチエ(5811m)。登頂許可とれず変更か。



小林	石井左右平	石井茂雄	(昭19)
前神	井草	中川	佐薙
直樹	長雄	中村	石原脩
(昭51)	(昭48)	(昭47)	恭
西牟田伸一	雅明	滋夫	(昭30)
(昭43)	(昭36)	保	(昭23)
中村	新任	留任	留任
中川	↑山本健一郎	留任	留任
中村	留任	留任	留任
佐薙	留任	留任	議長

■平成19年度 役員選任

◆刊行物  
針葉樹会報  
109号（07年6月既刊）

総会 6月26日 如水会館  
部室の整備 9月29日 国立  
新年会 08年1月

白石 章治（昭61）  
古田 茂（平7）  
留任

代表幹事	前神直樹
總務幹事	松田重明（昭53）
會計幹事	古瀬泰介（平8）
小島中西	留任
和人茂	留任
（昭40）	留任
新任↑有賀盈	留任

住所 東京都世田谷区喜多見5-21-1  
TEL 157-0067  
電話 03(3416)6757  
e-mail samma5216@yahoo.co.jp

◆監事  
山本 尚禎（昭36）  
中村 雅明  
留任  
新任↑渡辺嘉佑  
■新入会員

## ■新入会員

会員二逝去

昭和36年法学部入学。入学時に山岳部に入部。36・37年度のほぼすべての活動に参加。39年に退部。現在、鎌倉の鶴岡八幡宮西館で茶道の指導をされている。推薦人：小島和人  
住所 東京都国立市中1-2-52-402  
〒186-0004  
電話 042(575)4045

の活動に参加してきたのを縁に入会することになった。推薦人＝石、有賀、中川、小林（正）、

## 針葉樹会平成 18 年度 一般会計決算

(平成 18 年 6 月 1 日～平成 19 年 5 月 31 日)

支出			収入		
項目	実績	予算	項目	実績	予算
会報発行費	223,075	400,000	前年度繰越	205,291	205,291
山岳部補助	0	74,000	納入会費	518,000	530,000
通信連絡費	68,129	60,000	会合余剰金	117,037	10,000
慶弔費	63,779	30,000	郵便貯金利子	314	5
学生保険補助	0	20,400		0	0
次年度への繰越	485,659	160,896			
合計	840,642	745,296	合計	840,642	745,296

## 針葉樹会平成 18 年度 遭難対策基金決算

(平成 18 年 6 月 1 日～平成 19 年 5 月 31 日)

支出			収入		
項目	実績	予算	項目	実績	予算
学生保険補助	0	20,400	前年度繰越	3,937,857	3,937,857
	0	0	うち遭難対策基金	3,037,857	3,037,857
	0	0	うち遠征基金	900,000	900,000
	0	0	一般会計より(学生保険補助)	0	20,400
次年度繰越	3,939,031	3,938,857	利息他	1,174	1,000
うち遭難対策基金	3,039,031	3,038,857			
うち遠征基金	900,000	900,000			
合計	3,939,031	3,959,257	合計	3,939,031	3,959,257

## 針葉樹会平成 19 年度 一般会計予算

(平成 19 年 6 月 1 日～平成 20 年 5 月 31 日)

支出			収入		
項目	金額	前期実績	項目	金額	前期実績
会報発行費	450,000	223,075	前年度繰越	485,659	205,291
山岳部補助	50,000	0	納入会費	470,000	518,000
通信連絡費	70,000	68,129	会合余剰金	10,000	117,037
慶弔費	80,000	63,779	郵便貯金利子	200	314
学生保険補助	20,400	0		0	0
日本山岳会会費	24,000	0		0	0
WEB Site開設費	50,000	0		0	0
次年度への繰越	221,459	485,659			
合計	965,859	840,642	合計	965,859	840,642

## 針葉樹会平成 19 年度 遭難対策基金予算

(平成 19 年 6 月 1 日～平成 20 年 5 月 31 日)

支出			収入		
項目	金額	前期実績	項目	金額	前期実績
学生保険補助	20,400	0	前年度繰越	3,939,031	3,937,857
山岳部室改装費	400,000	0	うち遭難対策基金	3,039,031	3,037,857
	0	0	うち遠征基金	900,000	900,000
	0	0	一般会計より(学生保険補助)	20,400	0
次年度繰越	3,540,031	3,939,031	利息他	1,000	1,174
うち遭難対策基金	2,640,031	3,039,031			
うち遠征基金	900,000	900,000			
合計	3,960,431	3,939,031	合計	3,960,431	3,939,031

◆今年の5月頃、有賀先輩から「次は君だよ。頼むよ」と御指示?があり、今号より会報編集幹事を引き継ぎました昭和40年卒の小島です。不慣れな者ですが、幸い、井草さん、川名さんが引き続い編集幹事を勤めてくれますのでお二人に助けてもらいたいながらお役に立てればと思っています。会員の皆様の御協力を宜しくお願ひいたします。初仕事で何人かの会員の皆さんと、原稿をお願いしながらお話する機会がありました。やはり会報は出来るだけ多くの会員に執筆頂き、多くの会員に読んで頂くことが大切だと実感しました。今後、出来るだけ沢山の会員に御登場願い、今回同様、色々な山に向かい合うお気持ちを伝えて頂くよう工夫をしてまいりたいと思います。新しい連載企画として「わが現役時代」をスタート、第一回として石井大先輩に御登場頂きました。今後しばらく大先輩に御登場いただこうと思っております。

今回の石井さんのお話は、奇しくも私の生まれた1942年の記録のお話で、針葉樹会の幅広さと連続性のようなものを感じました。

(小島)

◆今号は夏休みもあつたせいか、いろいろな方の原稿を載せることができました。次号もふるつてご寄稿お願いいたします。

私自身はといえば、山登りからはすっかり遠ざかっていますが、先日、久しぶりに奥多摩の沢に行つてきました。といつても沢登りではなく、ワ

サビ田の手伝いです。サラリーマンをリタイヤしたおっさん達が、放置されていたワサビ田を借りて修築し、栽培しているのです。この前の台風による記録的大雨でダメージを受けた田んぼの復旧ということで、助つ人に行つてきました。実態は土木作業そのものですが、夜は居酒屋で地元の人と騒ぐ、こういう山の楽しみ方もあるのだな、と新発見でした。

(井草)

◆半年前から肩こりがひどくなり、目のくまもなおらなくなり、年だからあきらめねばとしょげていました。8月に韓国に行く機会があり、漢医に相談したところ、「脈が弱い。身体が弱いわりに心ががんばってしまっている」との診断。がんばり屋といわれるのはまんざらでもないけれど、いつも滑り込みぎりぎりセーフで生活をまわしていることを自覚しているので、「やばい、見抜かれた」と思った次第です。ジムのトレーニングで「心身ヨーガ」を新たに試したほか、10月の登山は「ひとり」と「癒し」をテーマに吾妻連峰を縦走しました。心身ヨーガでは、ストレッチと呼吸法プラス意識において、自分の身体に「ありがとう」と言うことを学びました。これをやると身体が「ほーーー」と脱力します。どこかがしんどい方は、だまされたと思ってお試しください。ちなみに最近は仕事量もちょうどいい具合になり、体調も復活しています。

(川名)

